

官報號外

昭和十七年一月二十三日

○第七十九回 帝國議會衆議院議事速記錄第四號

昭和十七年一月二十二日(木曜日)

午後二時七分開議

議事日程 第三號

昭和十七年一月二十二日

午後二時開議

第一昭和十五年法律第六十九號中改正法律案(支那事變ニ關スル一時賜金トシテ交付スル爲公債發行ニ關スル件)(政府提出)

第二朝鮮事業公債法中改正法律案(政府提出)

第三臺灣事業公債法中改正法律案(政府提出)

第四高等商船學校及商船學校ノ移管(政府提出)

第五米穀需給調節特別會計法中改正法律案(政府提出)

第六作業會計法中改正法律案(政府提出)

第七勞働者年金保險特別會計法案(政府提出)

第八昭和十七年度一般會計歲出ノ財源ニ充ツル爲公債發行ニ關スル法律案(政府提出)

第九昭和十五年法律第七號中改正法律案(造幣局東京出張所ノ廳舍、工場其ノ他ノ建物及其ノ附屬設備ノ新設擴張ニ要スル經費ニ關スル件)(政府提出)

第十昭和十三年法律第五十三號中改正法律案(印刷局据置運轉資本補足ニ關スル件)(政府提出)

第十一昭和十五年法律第七十九號中改正法律案(陸軍作業會計法、陸軍航空工廠資金特別會計法及海軍工廠資金會計法ノ臨時特例ニ關スル件)(政府提出)

第十二海軍工廠資金會計法中改正法律案(政府提出)

第十三木炭賣給調節特別會計据置運轉資本臨時補足ニ關スル法律案(政府提出)

第十四帝國鐵道會計法中改正法律案(政府提出)

第十五昭和十三年法律第二十三號中改正法律案(關東局、朝鮮總督府、臺灣總督府及樺太廳ノ各特別會計ニ於尓租稅收入ノ一部ニ相當スル金額等ヲ臨時軍事費特別會計ニ繰入ルルコトニ關スル件)(政府提出)

第十六南方開發金庫法案(政府提出)

第十七日本銀行法案(政府提出)

第十八戰時金融金庫法案(政府提出)

第十九臨時資金調整法中改正法律案(政府提出)

第二十所得稅法中改正法律案(政府提出)

第二十一法人稅法中改正法律案(政府提出)

第二十二所得稅法人稅内外地關涉法中改正法律案(政府提出)

第二十三相續稅法中改正法律案(政府提出)

第二十四織物消費稅法中改正法律案(政府提出)

第二十五物品稅法中改正法律案(政府提出)

第二十六電氣瓦斯稅法案(政府提出)

第二十七廣告稅法案(政府提出)

第二十八馬券稅法案(政府提出)

第二十九印紙稅法中改正法律案(政府提出)

第三十臨時利得稅法中改正法律案(政府提出)

第三十一特別法人稅法中改正法律案(政府提出)

第三十二營業稅法中改正法律案(政府提出)

第三十三臨時租稅措置法中改正法律案(政府提出)

第三十四國庫出納金端數計算法中改正法律案(政府提出)

第三十五正法律案(政府提出)

第三十六戰時災害國稅減免法案(政府提出)

第三十七地方分與稅法中改正法律案(政府提出)

第三十八戰時災害保護法案(政府提出)

第三十九臨時資金調整法中改正法律案(政府提出)

第四十國民更生金庫法中改正法律案(政府提出)

第四十一帝國石油株式會社法中改正法律案(政府提出)

第四十二重要物資管理營團法案(政府提出)

第二十所得稅法中改正法律案(政府提出)

第一讀會

第四十四帝國燃料興業株式會社法中改正法律案(政府提出)

第一讀會

第四十三帝國鑄業開發株式會社法中改正法律案(政府提出)

第一讀會

第四十五郵便法中改正法律案(政府提出)

第一讀會

第四十六郵便貯金法中改正法律案(政府提出)

第一讀會

第四十七鐵道敷設法中改正法律案(政府提出)

第一讀會

第四十八地方鐵道補助法中改正法律案(政府提出)

第一讀會

第四十九國民體力法中改正法律案(政府提出)

第一讀會

第五十國民醫療法案(政府提出)

第一讀會

第五十一健康保險法中改正法律案(政府提出)

第一讀會

第五十二國民健康保險法中改正法律案(政府提出)

第一讀會

第五十三戰時災害保護法案(政府提出)

第一讀會

(左ノ報告ハ朗讀ヲ經サルモ参照ノ爲

茲ニ掲載ス)

(第一號)昭和十六年度歲入歲出總豫算追加案

(特第一號)昭和十六年度各特別會計歲入歲出豫算追加案

明治三十五年三月三十日
第三種郵便物認可

(第一號) 昭和十七年度歲入歲出總豫算追加案

(特第一號) 昭和十七年度各特別會計歲入歲出豫算追加案

(追第一號) 豫算外國庫ノ負擔トナルベキ契約ヲ爲スヲ要スル件

昭和十五年度歲入歲出總決算

昭和十五年度各特別會計歲入歲出總決算

昭和十五年度歲入歲出總決算

(以上一月二十一日提出)

議員ヨリ提出セラレタル議案左ノ如シ

農地世襲法案

提出者

林 平馬君 森田 福市君
(以上一月二十一日提出)

一去二十日東條内閣總理大臣ヨリ左ノ通發

令アリタル旨ノ通牒ヲ受領セリ

内閣恩給局長 平木 弘

企畫院部長 柴田彌一郎 森川 覚三
秋永 月三

柏原兵太郎 松田 令輔

同 同 同

企畫院書記官 亀山 孝一

興亞院部長 松村 久保 文藏

興亞院書記官 久保 文藏

第七十九回帝國議會政府委員被仰付

一昨二十一日衆議院規則第十五條但書ニ依

リ議長ニ於テ議席ヲ左ノ通變更セリ

一一 岡野 龍一君 鹿兒島縣第三區選出議員

○議長(田子一民君) 是ヨリ會議ヲ開キマス、日程第一乃至第五ハ便宜上一括議題トナスニ御異議アリマセヌカ

〔異議ナシト呼ブ者アリ〕
○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマス、仍テ日程第一、昭和十五年法律第六十

九號中改正法律案、日程第一、朝鮮事業公債法中改正法律案、日程第三、臺灣事業公債法中改正法律案、日程第四、高等商船學校及商船學校ノ移管ニ伴フ一般會計及學校

法律案、右五案ヲ括シテ第一讀會ヲ開キ

マス——賀屋大藏大臣

第一 昭和十五年法律第六十九號中改正法律案(支那事變ニ關スル一時賃金トシテ交付スル爲公債發行ニ關スル件)(政府提出)

第二 朝鮮事業公債法中改正法律案(政府提出)

第三 臺灣事業公債法中改正法律案(政府提出)

第四 高等商船學校及商船學校ノ移管(政府提出)

第五 米穀需給調節特別會計法中改正法律案(政府提出)

第六條 本會計ニ於テヘ食糧ノ賣渡代金、借入金及附屬雜收入ヲ以テ其ノ歲入ト

涉ニ關スル法律案

一般會計及學校及圖書館特別會計ノ關

昭和十六年十二月三十一日現在ノ學校及

圖書館資金ニシテ東京高等商船學校、神戶高等商船學校、富山商船學校、鳥羽商

船學校、大島商船學校、鹿兒島商船學校、廣島商船學校、粟島商船學校及弓削商船

學校ノ各學校每ニ區分整理スルモノハ當

分ノ内其ノ儘學校及圖書館資金トシテ當

該學校每ニ區分整理スペシ

前項ニ該當スルモノノ外昭和十六

年十二月三十一日現在ノ學校及圖書館資

金ニシテ東京高等商船學校及神戶高等商

船學校ノ用ニ供スルモノハ之ヲ一般會計

ノ所屬ト爲スベシ

東京高等商船學校、神戶高等商船學校、

富山商船學校、島羽商船學校、大島商船

學校、鹿兒島商船學校、廣島商船學校、

粟島商船學校及弓削商船學校ノ昭和十六

年度ニ於ケル學校及圖書館特別會計法第

八條ノ施行豫算ノ歲入殘餘ハ之ヲ學校及

圖書館資金ニ編入シ第一項ノ資金ト併セ

當該學校每ニ區分整理スペシ

第一項及前項ノ規定ニ依リ區分整理シタ

ル資金ヨリ生ズル收入ハ豫算ノ定ムル所

ニ依リ之ヲ一般會計ニ繰入レ當該學校ノ

經費ニ充ツルコトヲ得

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

朝鮮事業公債法中改正法律案

臺灣事業公債法中改正法律案

臺灣事業公債法中改正法律案

第一條 食糧管理ノ爲ニスル食糧ノ買入、賣渡、交換、貸付、交付、加工、製造

又ハ貯藏ニ關スル一切ノ歲入歲出ハ之

ヲ一般會計ト區分シ特別會計ヲ設置ス

第三條 第一項中「米穀ヲ「食糧」ニ改ム

第四條ノ三中「八億五千萬圓」ヲ「二十一億圓」ニ改ム

附 則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第一條 食糧管理ノ爲ニスル食糧ノ買入、賣渡、交換、貸付、交付、加工、製造

又ハ貯藏ニ關スル一切ノ歲入歲出ハ之

ヲ一般會計ト區分シ特別會計ヲ設置ス

第三條第一項中「米穀ヲ「食糧」ニ改ム

第四條ノ三中「八億五千萬圓」ヲ「二十一億圓」ニ改ム

附 則

本法ハ昭和十七年度ヨリ之ヲ施行ス

第六條ノ二中「米穀ノ數量又ハ市價ノ變動ニ基ク」ヲ「食糧ノ」ニ改ム

第六條ノ二中「米穀證券」ヲ「食糧證券」ニ付加フ

國債整理基金特別會計法第二條第四項中

「米穀證券」ヲ「食糧證券」ニ改メ同法ニ左

ノ一條ヲ加フ

第十三條 第二條第四項ノ規定ノ適用

昭和九年法律第二十九號附則第二項ヲ削

ル

國債整理基金特別會計法第二條第四項中

「米穀證券」ヲ「食糧證券」ニ付加フ

ニ付テハ「米穀證券」ハ之ヲ「食糧證券」

看做ス

(國務大臣賀屋興宣君登壇)

○國務大臣(賀屋興宣君) 只今議題トナリ

マシタ昭和十五年法律第六十九號中改正法

律案外四件ニ付キマシテ其ノ提案ノ理由ヲ

説明致シマス

先づ昭和十五年法律第六十九號中改正法

律案ニ付キマシテ説明申上ゲマス、從來支

那事變ニ關シ功勞アリタル陸海軍軍人、其

ノ他ニ對スル行賞ハ、昭和十五年度以降緩

急ノ順序ヲ考慮シ實行セラルコト相成

ツテ居リマシテ、其ノ昭和十五年度分及ビ

同十六年度分ト致シマシテハ、現行ノ昭和

十五年法律第六十九號ニ依リ總額六億三千

ヲ爲シ一時之ヲ補足スルコトヲ得但シ其ノ金額二千萬圓ヲ超過スルコトヲ得ズ
前項ノ借入金ハ遲クトモ翌年度ニ於テ之ヲ償還スベシ
大藏大臣ハ第四項ノ借入金ニ代へ當該年度内ニ限り國庫餘裕金ヲ繰替使用スルコトヲ得
一般會計ハ當分ノ内豫算ノ範圍内ニ於テ燃料局酒精部特別會計ニ繰入金ヲ爲スコトヲ得
第二條ノ改正規定ニ依リ燃料局酒精部ノ据置運轉資本ニ充テタルアルコール及アルコール原料竝ニ機械運轉用品及備品ノ價額ニ相當スル金額ハ後日之ヲ一般會計ヨリ專賣局特別會計ニ繰入ルベシ

勞働者年金保險特別會計法案

勞働者年金保險特別會計法

第一條 勞働者年金保險事業ヲ經營スル爲特別會計ヲ設置シ其ノ歲入ヲ以テ其ノ歲出ニ充ツ

第二條 本會計ニ於テハ保險料、一般會計ヨリノ受入金、積立金ヨリ生ズル收入及附屬雜收入ヲ以テ其ノ歲入トシ保險給付費、福祉施設費、事業取扱費、營繕費其ノ他ノ諸費用以テ其ノ歲出トス

第三條 本會計ニ於ケル歲入總額ノ歲出總額ニ超過スル金額ハ之ヲ積立ツベシ
本會計ノ歲計ニ不足アルトキハ積立金ヨリ之ヲ補足スベシ

第四條 本會計ニ於テ玄拂上現金ニ餘裕アルトキハ之ヲ國債ヲ以テ保有シ又ハ大藏省預金部ニ預入ルベシ

第五條 本會計ノ積立金ハ國債ヲ以テ保有シ又ハ大藏省預金部ニ預入レ之ヲ運用スルコトヲ得

第六條 政府ハ毎年本會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ之ヲ帝國議會ニ提出スベシ
第七條 本會計ノ收入支出ニ關スル規程

八勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附 則

本法ハ昭和十七年度ヨリ之ヲ施行ス

第一條第一項但書中「七百萬圓」ヲ「五千百萬圓」ニ改ム

附 則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○國務大臣賀屋興宣君登壇
マシタ作業會計法中改正法律案外六件ニ付キマシテ、其ノ提案ノ理由ヲ説明致シマシテ、先づ作業會計法中改正法律案ニ付キマシテ説明申上げマス、大藏省及ビ商工省間ニ基ク勅令ノ適用ニ關シ必要アル場合ニ於テ本會計ニ繰入金ヲ爲スコトヲ得

昭和十七年度一般會計歲出ノ財源ニ充ツル爲公債發行ニ關スル法律案

第一條 政府ハ昭和十七年度一般會計歲出ノ財源ニ充ツル爲他ノ法律ニ依リ起債シ得ル金額ノ外十三億七千八百六十萬圓ヲ限り公債ヲ發行シ又ハ借入金ヲ爲スコトヲ得

第二條 政府ハ昭和十七年度一般會計歲出豫算翌年度繰越額ノ財源ニ充ツル爲他ノ法律ニ依リ起債シ得ル金額ノ外昭和十八年度ニ於テ公債ヲ發行シ又ハ借入金ヲ爲スコトヲ得

第三條 前二條ノ規定ニ依ル公債ノ發行價格差減額ヲ補填スル爲必要アル場合依ル公債又ハ借入金ト通ジテ前條ノ制限額ヲ超ユルコトヲ得

第四條 本會計ニ於テハ前二條ノ制限以外ニ公債ヲ發行シ又ハ借入金ヲ爲スコトヲ得

第五條 本會計ニ於ケル歲入總額ノ歲出總額ニ超過スルコトヲ得

第六條 本會計ノ歲計ニ不足アルトキハ之ヲ補足スルコトヲ得

第七條 本會計ノ歲入歲出豫算ト共ニ之ヲ帝國議會ニ提出スベシ

第八條 本會計ノ收入支出ニ關スル規程

（國務大臣賀屋興宣君登壇）

マシタ作業會計法中改正法律案外六件ニ付

キマシテ、其ノ提案ノ理由ヲ説明致シマシテ、先づ作業會計法中改正法律案ニ付キマシテ説明申上げマス、大藏省及ビ商工省間ニ基ク勅令ノ適用ニ關シ必要アル場合ニ於ケル所管事務ノ調整ノ爲メ、從來大藏大臣ノ管理ニ屬シマシタ「アルコール」專賣ニ關シマスル事務ヲ商工大臣ノ管理ト致シマシタノニ伴ヒマシテ、之ニ關スル會計經理モ從來ノ專賣局特別會計ヨリ分離シ、「アルコール」專賣ニ關シマスルモノヲ新タニ別築ノ工事ヲ營ム者ニ對シ其ノ材料物品ヲ供給スル爲陸軍造兵廠、陸軍製絨廠、陸軍航空工廠資金又ハ海軍工廠資金ノ各特種會計ニ於テ當該材料物品ヲ買入レ之ヲ當該事業主ニ對シ賣拂フコトヲ得

第九條 本會計ニ於テ當該材料物品ヲ買入レ之ヲ當該事業主ニ對シ賣拂フコトヲ得

第十條 本法ハ昭和十七年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附 則

本法ハ昭和十五年法律第七號中改正法律案

昭和十五年法律第七號中左ノ通改正ス

第一項中「東京出張所」ヲ削リ「四百十五萬圓」ヲ「二千三百五萬八千百七十五圓」ニ、「昭和十七年度」ヲ「昭和十九年度」ニ改ム

附 則

本法ハ昭和十七年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

政府ハ海軍工廠資金會計法第二條ノ改正規定ニ依ル一般會計ヨリノ繰入ニ代へ臨時軍事費ヲ以テ購入シタル材料物品ヲ海軍工廠資金會計ノ組入レ其ノ價額ヲ以テ海軍工廠資金ノ増加ニ充ツルコトヲ得

次ニ勞働者年金保險特別會計法案ニ付キ

說明致シマス、勞働者年金保險法ニ基キマシテ政府ノ管掌致シマスル勞働者年金保險事業ニ關スル歲入歲出ハ、之ヲ一般會計ト區分シテ經理スルノヲ適當ト認ヌマス、然ル所是ガ爲ニハ特別會計ヲ設置スルノ必要ガアリマスルノト、又勞働者年金保險法ノ施行ニ伴ヒマシテ、郵便年金特別會計ト本會計トノ間ニ關涉ガ起リマスルノデ、之ニ關連シ必要ナル規定ヲ設ケマスルトノ爲メ、本法律案ヲ提出致シタ次第アリマス

次ニ勞働者年金保險特別會計法案ニ付キ

說明致シマス、勞働者年金保險法ニ基キマシテ政府ノ管掌致シマスル勞働者年金保險事業ニ關スル歲入歲出ハ、之ヲ一般會計ト區分シテ經理スルノヲ適當ト認ヌマス、然ル所是ガ爲ニハ特別會計ヲ設置スルノ必要ガアリマスルノト、又勞働者年金保險法ノ施行ニ伴ヒマシテ、郵便年金特別會計ト本會計トノ間ニ關涉ガ起リマスルノデ、之ニ關連シ必要ナル規定ヲ設ケマスルトノ爲メ、本法律案ヲ提出致シタ次第アリマス

次ニ昭和十七年度一般會計歲出ノ財源ニ充ツル爲公債發行ニ關スル法律案ニ付キ説明致シマス、昭和十七年度歲入歲出總豫算追加第一號ニ計上セル經費ノ財源ノ一部ト軍工廠資金會計ノ材料物品ニ組入レ其ノ價額ヲ以テ海軍工廠資金ノ増加ニ充ツルコトヲ得

次ニ昭和十七年度歲出豫算中若干ノ金額ハ翌年度ニ繰越サル結果ニナルデアラウト存ゼラレマスル所、其ノ繰越額ノ財源デアル公

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和十三年法律第五十三號中改正法律案

昭和十三年法律第五十三號中左ノ通改正ス

債へ必ズシモ之ヲ昭和十七年度中ニ於テ發行スルノ必要ハナインデアリマス、仍テ之ヲ其ノ翌年度ニ於テ發行シ得ルコトトスルヲ適當ト認メマシテ、本法律案ヲ提出致シマシタ次第アリマス

次ニ昭和十五年法律第七號中改正法律案ニ付キ説明申上ゲマス、從來ノ造幣局東京出張所ノ廳舍等ノ新營擴張ニ要スル經費ハ、昭和十五年度ヨリ昭和十七年度ニ瓦ル繼續額四百十五万圓デアリマシテ、是ガ財源トシテ造幣局資金ノ内ヨリ同金額ヲ一般會計ニ繰入ルコト相成ツテ居ルノアリマスルガ、造幣局ニ於ケル事業分量ノ増大ニ伴ヒマシテ、更ニ今回造幣局ノ工場等ヲ新設スルノ必要ガ生ジマシタル等ノ爲メ、之ニ必要ナル經費ニ充用スル爲メ造幣局資金ノ内ヨリ更ニ千八百九十万八千百七十五圓ヲ拂出し、一般會計ニ繰入ルコトナス等ノ必要ガアリマスノデ、本法律案ヲ提出シタ次第アリマス

次ニ昭和十三年法律第五十三號中改正法律案ニ付キ説明申上ゲマス、印刷局ニ於ケル事業量ハ近年急激ニ増大致シテ參リマシタ關係上、從來ノ据置運轉資本ヲ以テシマシテハ其ノ事業遂行上時ニ困難ヲ伴ヒマスルノデ、昭和十三年法律第五十三號ニ規定スル借入金ノ法定額ヲ千五百万圓ニ増額致シマシテ、据置運轉資本ニ不足ヲ生ジマシタル場合ニ一時補足シ得ベキ限度ヲ擴張スルノ必要ガアリマス爲メ、本法律案ヲ提出致シマシタ次第アリマス

次ニ昭和十五年法律第七十九號改正法律案ニ付キ説明申上ゲマス、支那事變ニ際シ陸海軍用ノ兵器等ノ製造修理等ノ圓滑ヲ圖ルノ緊要ナルニ顧ミマシテ、曩ニ昭和十五年法律第七十九號ヲ制定シ、陸軍作業會計法、陸軍航空工廠資金特別會計法及海軍工廠資金會計法ノ特例ヲ定メ、前記特別會計ニ屬スル材料物品ノ賣拂ヒノ途ヲ開イタ

ノデアリマスルガ、其ノ後支那事變ハ發展シテ遂ニ大東亞戰爭トナルニ及ビマシテ、益兵器等ノ製造修理ハ繁忙ヲ呈シ、是等需要ノ圓滑ヲ圖ルノ必要が増大シテ參ワタノデアリマス、現行法ニ於キマシテハ軍需品工場事業場ニ材料物品ヲ供給シ得ルノハ、軍需品工場事業場ニ於テ其ノ材料物品ノ一部ガ不足シ、陸軍造兵廠、陸軍製絨廠、陸軍航空工廠資金、海軍工廠資金ノ各特別會計ニ屬スル材料物品ヲ供給スルニアラザレバ當該製造又ハ修理ヲ完成シ得ザル場合ニ限定シテアルノデアリマス、ソレデハ實行上支障ガアリマスルノデ、今回其ノ制限ヲ緩和シテ、廣く軍需品工場事業場ニ材料物品ヲ供給シ得ルコトシ、更ニ陸海軍用ノ施設ニ關スル土木建築ノ工事ヲ營ム者ニ對シマシテモ、材料物品供給ノ途ヲ閉クト共ニ、是等ノ材料物品ノ買入ニ要シマスル資金トシテ、今回三千五百万圓ヲ陸軍航空工廠資金ニ臨時補足スルコトト致シ、是ガ財源ニ付キマシテハ借入金ニ依ルコト致シマスル等ノ關係上、本法律案ヲ提出致シマシタ次第アリマス

次ニ海軍工廠資金會計法中改正法律案ニ付キ説明致シマス、海軍ノ造船及ビ造兵ノ工廠ニ於ケル事業量ハ著シク増大致シテ參リマシタ關係上、海軍工廠資金會計ニ於ケル歲入歳出モ亦著シク增加致シマシタル結果、從來ノ資金額ヲ以テシマシテハ、本會計ノ機能ヲ發揮スルコト頗ル困難トナリマシタノニ顧ミマシテ、本資金ノ法定額ヲ一億圓ニ増額スルノ必要ガアリマスルノト、當分ノ内事ノ需要充足ノ爲メ、必要アル場合ニハ海軍工廠資金ヲ以テ、海軍工廠資金會計法第一條ノ規定ニ依ル材料物品以外ノ材料物品ヲモ貯蓄スルコトヲ得ルコトトスルノ必要ガアルノデアリマス、又海軍工廠資金ニ臨時ニ不足ヲ來シマスル時ハ、現行ノ額等ヲ臨時軍事費特別會計ニ繰入ル

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマス、仍テ自程第十三、木炭需給調節特別會計據置運轉資本臨時補足ニ關スル法律案ニ改ム

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマス、仍テ勘議ノ如ク決定シマシタ——日程第十三乃至第十五ハ、便宜上一括議題トナスニ御異議アリマセヌカ

○議長(田子一民君) 依光君ノ動議ニ御異議アリマセヌカ

〔異議ナシト呼ブ者アリ〕

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマス、仍テ勘議ノ如ク決定シマシタ——日程第十四、帝國鐵道會計法中改正法律案、日程第十五、昭和十三年法律第二十三號中改正法律案、右三案ヲ一括シテ第一讀會ヲ開キマス——賀屋大藏大臣

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附則

木炭需給調節特別會計據置運轉資本臨時補足ニ關スル法律案

政府ハ木炭需給調節特別會計ノ據置運轉資本ニ不足アルトキハ九百萬圓ヲ限り借入金ヲ爲シ臨時之ヲ補足スルコトヲ得

第七條第一項中「監督上ノ諸費用」ヲ「監督及統制ニ要スル諸費用」ニ、「又」ヲ「並」ニ改ム

第九條ノ二 將來ニ於ケル鐵道改良費ノ財源ノ一部ニ充ツル爲資本勘定所屬資金トシテ鐵道改良準備金ヲ保有スルコトヲ得

每年度ニ於ケル鐵道改良準備金ヘノ繰入額ハ豫算ノ定ムル所ニ依ル

第十四條 鐵道改良準備金ハ大藏省預金部ニ預入レ之ヲ運用スルコトヲ得

第十六條ノ二 本會計ノ經營ニ妨ナキ限り一般ノ委託ニ依リ陸運ニ關スル機械器具等ノ製作修理又ハ調達ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ノ歲入歳出ハ用品勘定ノ所屬トス

附則

本法ハ昭和十七年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

日本通株式會社法中左ノ通改正ス

第九條ノ二 政府ハ二千萬圓ヲ限り社債ノ元利支拂ヲ保證スルコトヲ得

前項ノ保證ニ因ル政府ノ支出ハ帝國鐵道會計ノ收益勘定ノ歲出トス

第十三 木炭需給調節特別會計據置運轉資本臨時補足ニ關スル法律案(政府提出)

第一讀會

第十四 帝國鐵道會計法中改正法律案(政府提出)

第一讀會

第十五 昭和十三年法律第二十三號中改正法律案(政府提出)

第一讀會

昭和十三年法律第二十三號中改正法律案

昭和十三年法律第二十三號中改正法律

昭和十三年法律第二十三號中改正法律

要ニ備へ、將來ニ於ケル鐵道改良費ノ平準化ヲ國リマス爲メ、新タニ帝國鐵道特別會計ニ鐵道改良準備金制度ヲ設クル必要ガアリマスルノト、新タニ陸運統制ニ要スル經費ヲ本會計ノ負担トスルヲ適當ト認メマシタノト、交通輸送力ノ整備ヲ圖ルノ緊要ナルニ顧ミマシテ、本會計ノ經理ニ於テ、他ノ委託ニ應ジ鐵道輸送等ニ關シマス機械器具等ノ製作、修理又ハ調達ヲモナシ得ルコトト致シマス等ノ爲メ、本法律案ヲ提出致シマシタ次第アリマス。

次ニ昭和十三年法律第二十三號中改正法律案ニ付キ證明致シマス、昭和十三年法律第二十三號ノ規定ニ依リマシテ關東局、朝鮮總督府、臺灣總督府及ビ樺太廳ノ各特別會計ヨリ、其ノ租稅收入又ハ煙草專賣收入ノ一部ヲ、臨時軍事費特別會計ニ繰入ルルコトニ相成ツテ居リマスガ、今回新タニ朝鮮總督府特別會計ニ於ケル地稅、營業稅、資本利子稅、相續稅及ビ樺太廳特別會計ニ於ケル相續稅、是等ノ昭和十七年度以降ノ增徵ニ依ル増收額竝ニ關東局、朝鮮總督府、臺灣總督府及ビ樺太廳ノ各特別會計ニ於ケル電氣瓦斯稅、廣告稅又ハ馬券稅、關東局及ビ臺灣總督府ノ各特別會計ニ於ケル清涼飲料稅及ビ關東局特別會計ニ於ケル骨牌稅、自動車運賃又ハ通信料金創設ニ依ル收入額竝ニ關東局、朝鮮總督府、臺灣總督府及ビ樺太廳ノ各特別會計ニ於ケル鐵道運賃、自動車運賃又ハ通信料金ノ改正ニ依ル昭和十七年度以降ノ増收額ノ一部ヲ、毎年度豫算ノ定ムル所ニ依リ、臨時軍事費特別會計ニ繰入ルルコトニ致シマシタ所はガ會計上ノ處理ニ關シマシテ昭和十三年法律第二十三號中改正ヲ必要ト致シマスノデ、本法律案ヲ提出致シタ次第アリマス以上三件ノ法律案ニ付キマシテハ何卒御審議ノ上速力ニ協賛ヲ與ヘラレバコトヲ希望シマス(拍手)

○議長(田子一民君) 各案ノ審査ヲ付託スベキ委員ノ選舉ニ付テ御諸リ致シマス

○依光好秋君 日程第十三ハ政府提出米穀需給調節特別會計法中改正法律案委員ニ併セ付託シ、日程第十四及び第十五ノ兩案ハ一括シテ政府提出昭和十五年法律第六十九號中改正法律案外三件委員ニ併セ付託セラレントコトヲ望ミマス。

○議長(田子一民君) 依光君ノ動議ニ御異議ゴザイマセヌカ

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマス、仍テ動議ノ如ク決シマシタ——日程第十六、南方開發金庫法案ノ第一讀會ヲ開キマス——賀屋大藏大臣

第一條 中「清涼飲料稅」ヲ削リ「臨時利得稅」ニ、「臨時利得稅」ニ、「酒稅」ヲ「相續稅」ニ改メ「資本利子稅」ニ、「酒稅」ヲ「相續稅」ニ改メ「資本利子稅」ノ下ニ及朝鮮總督府特別會計ニ於ケル清涼飲料稅ヲ、「骨牌稅」ノ下ニ及朝鮮總督府特別會計ニ於ケル地稅、營業稅、資本利子稅及酒稅ヲ、「特別入場稅」ノ下ニ「電氣瓦斯稅」、「廣告稅」、「馬券稅」ヲ、「遊興稅」ノ下ニ「關東局及臺灣總督府ノ各特別會計ニ於ケル清涼飲料稅及關東局特別會計ニ於ケル骨牌稅」ヲ加フ

第二條 關東局、朝鮮總督府、臺灣總督府及樺太廳ノ各特別會計ニ於ケル

今回ノ鐵道運賃、自動車運賃又ハ通信料金ノ改正ニ因ル昭和十七年度以降ノ

增收額中勅令ノ定ムル金額ハ毎年度豫算ノ定ムル所ニ依リ之ヲ當該特別會計

ヨリ臨時軍事費特別會計ニ繰入ルベシ

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

(國務大臣賀屋興宣君登壇)

○國務大臣(賀屋興宣君) 只今議題トナリ

マシタ木炭需給調節特別會計据置運轉資本臨時補足ニ關スル法律案外二件ニ付キマシテ、其ノ提案ノ理由ヲ説明致シマス

先づ木炭需給調節特別會計据置運轉資本臨時補足ニ關スル法律案ニ付キ説明申上ゲ

マス、木炭需給調節ノ實情ニ顧ミマスルニ現在ノ木炭需給調節特別會計ノ据置運轉資本百万圓ヲ以テシマシテハ、同特別會計ノ運營ニ頗ル困難ナ感シマスルノデ、九百万圓ヲ限リ臨時之ヲ補足シ、現行ノ据置運轉資本百万圓ト合シテ一千萬圓ト致シ、是ガ財源ハ借入金ニ依ルコトト致シマスル爲メ、本法律案ヲ提出致シタ次第アリマス

次ニ帝國鐵道會計法中改正法律案ニ付キ要ニ備へ、將來ニ於ケル鐵道改良費ノ平準化ヲ國リマス爲メ、新タニ帝國鐵道特別會計ニ鐵道改良準備金制度ヲ設クル必要ガアリマスルノト、新タニ陸運統制ニ要スル經費ヲ本會計ノ負担トスルヲ適當ト認メマシタノト、交通輸送力ノ整備ヲ圖ルノ緊要ナルニ顧ミマシテ、本會計ノ經理ニ於テ、他ノ委託ニ應ジ鐵道輸送等ニ關シマス機械器具等ノ製作、修理又ハ調達ヲモナシ得ルコトト致シマス等ノ爲メ、本法律案ヲ提出致シマシタ次第アリマス。

次ニ昭和十三年法律第二十三號中改正法律案ニ付キ證明致シマス、昭和十三年法律第二十三號ノ規定ニ依リマシテ關東局、朝鮮總督府、臺灣總督府及ビ樺太廳ノ各特別會計ヨリ、其ノ租稅收入又ハ煙草專賣收入ノ一部ヲ、臨時軍事費特別會計ニ繰入ルルコトニ相成ツテ居リマスガ、今回新タニ朝鮮總督府特別會計ニ於ケル地稅、營業稅、資本利子稅、相續稅及ビ樺太廳特別會計ニ於ケル相續稅、是等ノ昭和十七年度以降ノ增徵ニ依ル増收額竝ニ關東局、朝鮮總督府、臺灣總督府及ビ樺太廳ノ各特別會計ニ於ケル電氣瓦斯稅、廣告稅又ハ馬券稅、關東局及ビ臺灣總督府ノ各特別會計ニ於ケル清涼飲料稅及ビ關東局特別會計ニ於ケル骨牌稅、自動車運賃又ハ通信料金ノ創設ニ依ル收入額竝ニ關東局、朝鮮總督府、臺灣總督府及ビ樺太廳ノ各特別會計ニ於ケル鐵道運賃、自動車運賃又ハ通信料金ノ改正ニ依ル昭和十七年度以降ノ増收額ノ一部ヲ、毎年度豫算ノ定ムル所ニ依リ、臨時軍事費特別會計ニ繰入ルルコトニ致シマシタ所はガ會計上ノ處理ニ關シマシテ昭和十三年法律第二十三號中改正ヲ必要ト致シマスノデ、本法律案ヲ提出致シタ次第アリマス以上三件ノ法律案ニ付キマシテハ何卒御審議ノ上速力ニ協賛ヲ與ヘラレバコトヲ希望シマス(拍手)

第四條 南方開發金庫ハ法人トス

第一條 南方開發金庫法案(政府提出)

第一條 南方開發金庫法案(政府提出)

第一讀會

第五條 政府ハ一億圓ヲ南方開發金庫ニ出資スベシ

前項ノ出資ハ國債證券ヲ交付シテアラ

爲スコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ交付スル國債證券ノ交付價格ハ時價ヲ參酌シテ大藏大臣之ヲ定ム

第六條 政府ハ其ノ持分ノ一部ヲ讓渡スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ讓渡ニ關シ必要ナル事項ハ、勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 出資ノ第一回ノ拂込金額ハ出資會計ヨリ、其ノ租稅收入又ハ煙草專賣收入ノ一部ヲ、臨時軍事費特別會計ニ繰入ルルコトニ相成ツテ居リマス——賀屋大藏大臣

マス——仍テ動議ノ如ク決シマシタ——日程第十六、南方開發金庫法案ノ第一讀會ヲ開キマス——

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマス、仍テ動議ノ如ク決シマシタ——日程第十六、南方開發金庫法案ノ第一讀會ヲ開キマス——

ズ但シ特別ノ事情ニ基キ内務大臣及大臣ノ認可ヲ受ケタル場合ハ此ノ限トスル事由發生シタル場合ニ於テ其ノ處置ニ關シテハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第十二條 南方開發金庫ニ非ザル者ハ南方開發金庫又ハ之ニ類似スル名稱ヲ用フルコトヲ得ズ

第十三條 南方開發金庫ニ役員トシテ總裁副總裁各一人、理事三人以上及監事二人以上ヲ置ク

第十四條 總裁ハ南方開發金庫ヲ代表シ其ノ業務ヲ總理ス

副總裁ハ定款ノ定ムル所ニ依リ南方開發金庫ヲ代表シ總裁ヲ輔佐シテ南方開發金庫ノ業務ヲ掌理シ總裁事故アルトキハ其ノ職務ヲ行フ

理由ハ定款ノ定ムル所ニ依リ南方開發金庫ヲ代表シ總裁及副總裁共ニ事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理シ總裁及副總裁共ニ事故アルトキハ其ノ職務ヲ代行フ

第十五條 監事ハ南方開發金庫ノ業務ヲ監査ス

第十六條 理事及監事ハ主務大臣之ヲ命ズ

定ムル所ニ依リ從タル事務所ノ業務ニ關シ一切ノ裁判上又ハ裁判外ノ行爲ヲトヲ得

第十七條 總裁、副總裁及理事ハ他ノ職

業ニ從事スルコトヲ得ズ但シ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十八條 南方開發金庫ノ職員ハ之ヲ法令ニ依リ公務ニ從事スル職員ト看做ス

第三條 ノ場合ニ於テ當該業務ニ從事スル銀行其ノ他命令ヲ以テ定ムル法人ノ職員ニ付亦前項ニ同ジ

前二項ノ職員ノ範圍ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第二章 職員

第十九條 第三章 業務

第十九條 南方開發金庫ハ資源ノ開發及利用ノ爲必要ナル融資又ハ投資ヲ爲スノ外左ノ業務ヲ行フ

一 預り金

二 地金銀ノ賣買

三 通貨ノ交換

四 爲替ノ賣買

第五章 會計

第二十九條 第三十條 第四章 債券

南方開發金庫ハ前項ノ業務ニ附帶スル業務ヲ行フコトヲ得

第二十條 南方開發金庫ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケ前條ノ業務ノ外南方開發金庫ノ目的達成上必要ナル業務ヲ行フコトヲ得

第三十條 南方開發金庫ハ設立ノ時及毎事業年度ノ初ニ於テ財產目錄、貸借對照表及損益計算書ヲ作成シ主務大臣ノ承認ヲ受ケベシ

第六章 監督及補助

第三十一條 第三十二條 第三十三條 第三十四條

南方開發金庫ハ主務大臣之ヲ監督ス

南方開發金庫借入金ヲ爲サントスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第三十五條 第三十六條 第三十七條 第三十八條 第三十九條 第四十條

南方開發金庫剩餘金ノ處分ヲ爲サントスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第三十條 第三十一條 第三十二條 第三十三條 第三十四條 第三十五條

南方開發金庫ハ業務開始ノ際業務ノ方法ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ之ニ重大ナル變更ヲ加ヘントキハ償還ヲ爲サザルトキ

第三章 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

二 本法ニ規定セザル業務ヲ行ヒタルトキ

三 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

四 主務大臣ノ監督上ノ命令又ハ處分

第二十一條 第二十二條 第二十三條 第二十四條 第二十五條 第二十六條 第二十七條 第二十八條 第二十九條 第三十條 第三十一條 第三十二條 第三十三條 第三十四條 第三十五條

南方開發金庫ハ債券借換ノ額ノ十倍ヲ限リ債券ヲ發行スルコトヲ得

第二十二條 南方開發金庫ハ債券借換ノ爲一時前條ノ制限ニ依ラズ債券ヲ發行スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ債券ヲ發行シタルトキハ發行後一月以内ニ其ノ發行額面金額ニ相當スル舊債券ヲ償還スベシ

第二十三條 南方開發金庫ニ於テ債券ヲ發行セントスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第二十四條 政府ハ債券ノ元本ノ償還及利息ノ支拂ヲ保證スルコトヲ得

第三十五條 主務大臣ハ南方開發金庫ニ

第二十五條 債券ノ消滅時效ハ元本ニ在リテハ十五年、利息ニ在リテハ五年ヲ以テ完成ス

第二十六條 債券ノ所有者ハ南方開發金庫ノ財產ニ付他ノ債權者ニ先チテ自己ノ債權ノ辨濟ヲ受クル權利ヲ有ス

前項ノ規定ハ民法上ノ一般ノ先取特權ノ行使ヲ妨グルコトナシ

第二十七條 所得稅法及有價證券移轉稅法中國債以外ノ公債ニ關スル規定ハ債券ニ之ヲ準用ス

第二十八條 本章ニ規定スルモノヲ除クノ外債券ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五章 會計

第二十九條 南方開發金庫ノ事業年度ハ四月ヨリ翌年三月迄トス

第三十條 南方開發金庫ハ設立ノ時及毎事業年度ノ初ニ於テ財產目錄、貸借對照表及損益計算書ヲ作成シ主務大臣ノ承認ヲ受ケベシ

第六章 監督及補助

第三十一條 第三十二條 第三十三條 第三十四條 第三十五條

南方開發金庫ハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第三十二條 南方開發金庫借入金ヲ爲サントスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第三十三條 南方開發金庫剩餘金ノ處分ヲ爲サントスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第三十四條 南方開發金庫ハ業務開始ノ際業務ノ方法ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ之ニ重大ナル變更ヲ加ヘントキハ償還ヲ爲サザルトキ

第三章 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

二 本法ニ規定セザル業務ヲ行ヒタルトキ

三 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

四 主務大臣ノ監督上ノ命令又ハ處分

第三章 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

二 本法ニ規定セザル業務ヲ行ヒタルトキ

三 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

四 主務大臣ノ監督上ノ命令又ハ處分

第三章 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

二 本法ニ規定セザル業務ヲ行ヒタルトキ

三 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

四 主務大臣ノ監督上ノ命令又ハ處分

第三章 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

二 本法ニ規定セザル業務ヲ行ヒタルトキ

三 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

四 主務大臣ノ監督上ノ命令又ハ處分

第三章 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

二 本法ニ規定セザル業務ヲ行ヒタルトキ

三 第二十一條 又ハ第二十二條 第二項ノ規定ニ違反シ債券ノ發行ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキニ違反シタルトキ

四 主務大臣ノ監督上ノ命令又ハ處分

ニ違反シ登記ヲ爲スコトヲ怠り又ハ
不正ノ登記ヲ爲シタルトキ

二 第三十條ノ規定ニ依ル書類ヲ作成
セザルトキ、其ノ書類ニ記載スベキ
事項ヲ記載セズ若ハ不正ノ記載ヲ爲
シタルトキ又ハ其ノ書類ニ付主務大
臣ノ承認ヲ受ケザルトキ

第四十一條 第十二條ノ規定ニ違反シ南
方開發金庫又ハ之ニ類似スル名稱ヲ用
ヒタル者ハ五百圓以下ノ過料ニ處ス

附 則

第四十二條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以
テ之ヲ定ム

第四十三條 政府ハ設立委員ヲ命ジ南方
開發金庫ノ設立ニ關スル專務ヲ處理セ
シム

第四十四條 設立委員ハ定款ヲ作成シ主
務大臣ノ認可ヲ受クベシ

前項ノ認可アリタルトキハ設立委員ハ
遲滞ナク出資ノ第一回ノ拂込ヲ政府ニ
稟請スベシ

第四十五條 出資ノ第一回ノ拂込アリタ
ルトキハ設立委員ハ遲滞チク其ノ事務
ヲ南方開發金庫總裁ニ引渡スベシ

總裁前項ノ事務ノ引渡ヲ受ケタルトキ
ハ總裁、副總裁、理事及監事ノ全員ハ設
立ノ登記ヲ爲スニ因

リテ成立ス

第四十六條 南方開發金庫ノ初事業年度
ハ第二十九條ノ規定ニ拘ラズ成立ノ日
ヨリ昭和十八年三月迄トス

第四十七條 本法ニ規定スルモノヲ除ク
ノ外南方開發金庫ノ設立ニ關シ必要ナ
ル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四十八條 政府ハ南方開發金庫ニ對シ
貸付ヲ爲スコトヲ得
前項ノ貸付ニ關スル歲入歲出ハ臨時軍
事費特別會計ニ屬セシム

第四十九條 登錄稅法中左ノ通改正ス

第十九條第七號中「庶民金庫」ヲ上ニ「南
方開發金庫」ヲ、「庶民金庫法」ノ上ニ
「南方開發金庫法」ヲ、同條第十八號

中「庶民金庫」ノ上ニ「南方開發金庫」

ヲ加フ

第五十條 印紙稅法中左ノ通改正ス

第五條第六號ノ二ノ次ニ左ノ一號ヲ加
フ

六ノ二ノ二 南方開發金庫ノ發スル
債券

(國務大臣賀屋興宣君章壇)

○國務大臣(賀屋興宣君)只今議題ト相成
リマシタ南方開發金庫法案提案ノ理由ヲ説

明申上ダマス

大東亞戰爭ニ際シマシテ帝國ノ對南方經

濟政策ノ根本方針ハ、重要資源ノ需要ヲ充

足シ、當面ノ戰爭遂行ニ遺憾ナカラシムル

コトヲ主眼ト致シ、併セテ大東亞共榮圈ノ

自給自足體制ヲ確立セントスルコトニアリ

マスコトヘ今更申スマデモナイ所アリマ

ス、隨ニマシテ作戰ニ伴ヒ南方ニ於ケル豐

富ナル資源ノ開發利用ヲ效率的ニ且ツ重點

的ニ促進致シマスルコトハ極メテ肝要デア

リマス、是ガ爲メ必要ナル資金ヲ圓滑ニ供

給スルノ途ヲ開キ置クコトノ要アルコトハ

言ヲ俟タナイ所アリマス、而シテ南方諸

地域ニ於キマシテヘ現ニ作戰遂行中デアリ、

軍票ヲ使用ジテ居ルノデアリマス、他面ニ

於キマシテ本邦ト南方諸地域トノ間ニ於キ

マシテハ、尙早ニ確率的ナル爲替比率ヲ建テ

ルガ如キハ困難デモアリマス、又不適當

デアルト認メラレルノデアリマス、仍ツテ

當分ノ間ハ本邦ト南方諸地域トノ間ニ特殊
ノ場合ヲ除キ、資金ノ移動ヲ認メナイコト

ヲ適當ト考ヘラレルノデアリマス、隨ヒマ
シテ資源ノ利用及ビ開發ニ所要ノ資金ヲ調
達供給致シマスルニ付キマシテモ、斯クノ

如キ特殊ノ狀況ニ應ジマシテ、格別ノ工夫

ヲ凝ラスノ要ガアルノデアリマス、仍テ政

府ハ南方開發金庫ヲ設置致シ、同金庫ヲシ

テスカル状況ノ下ニ於テ必要ナル資金ノ圓

滑ナル供給ニ遺憾ナキヲ期スルヲ適當ト認

メタノデアリマス

又日本側金融機關ガ各地ニ於テ業務ヲ開

始致シマスル場合ニ於キマシテモ、差向キ

ハ資金ノ調達ガ困難ナル場合モ豫想セラレ

マスルシ、貸付等ニ付キマシテモ、必ズシ

モ普通銀行ノ業務ニ適シナイ長期固定的ナ

ルモノガ相當所要トナリマスルコトモ明カ

デアリマスノデ、此ノ種ノ貸付等ハ南方開

發金庫ヲシテ行ハシムルコトガ最モ適當ト

認メラレルノデアリマス

次ニ情勢ノ堆移ニ應ジマシテ現地通貨ト

軍票トノ交換、現地ニ於ケル預金ノ受入等

ヲ行ヒ、以テ通貨ノ調整ニ資シマスルコト

ハ固ヨリ、南方各地域相互間、或ハ本邦ト

南北地域間ニ於ケル併替取引ガ行ハレル事

態ニ於キマシテハ、一般爲替銀行ノ爲替瓦

調整ノ作用ノ如キハ、差當リ本金庫ニ行ハ

シムルコトガ必要デアル場合モ亦豫想致

サレルノデアリマス、又南方開發金庫ハ

現地ニ於テ借入金ヲナシ、或ハ主トシテ現

地ニ於キマシテ債券ヲ發行スル等ノ方法ニ

依リ、現地資金ノ潤澤ナル調達ヲ圖ルコト

ガ必要デアルト認メラレルノデアリマス、

之ヲ要スルニ南方開發金庫ヲ設置致シマス

ルコトハ、南方地域ノ今後ノ如何ナル情勢

ノ變化ニモ對應シ得ル如ク、同金庫ヲ以テ

帝國ノ通貨金融對策運營ノ原動力タル中樞

機關タラシムルノ配意ニ出デテ居ルモノデ

アリマシテ、此ノ意味合ニ於キマシテモ南方

開發金庫ノ業務ハ成ベク廣範圍ニ亘り得ル

ヤウ致シ置クヲ適當ト認ムルノデアリマス

尙ホ南方開發金庫ハ右ニ説明致シマシテ

ナル發揮ヲ圖ル爲國家ノ政策ニ即シ通

貨ノ調節、金融ノ調整及信用制度ノ保

持育成ニ任ズルヲ以テ目的トス

日本銀行ハ法人トス

〔異議ナシト呼ブ者アリ〕

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマ

ス、仍テ動議ノ如ク決シマシタ――日程第

十七乃至第十九ハ、便宜上一括議題トナス

ニ御異議ナリマセヌカ

○議長(田子一民君) 依光好秋君 本案ハ議長指名三十六名ノ

委員ニ付託セラレンコトヲ望ミマス

○議長(田子一民君) 依光君ノ動議ニ御異

議アリマセヌカ

メタノデアリマス(拍手)

○議長(田子一民君) 本案ノ審査ヲ付託ス

メタノデアリマス

○議長(田子一民君) 本案ハ議長指名三十六名ノ

委員ニ付託セラレンコトヲ望ミマス

○議長(田子一民君) 依光君ノ動議ニ御異

議アリマセヌカ

〔異議ナシト呼ブ者アリ〕

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマ

ス、仍テ動議ノ如ク決シマシタ――日程第

十八、戰時金融金庫法案、日程第十九、

臨時資金調整法中改正法律案、右三案ヲ一

括シテ第一讀會ヲ開キマス――賀屋大藏大

臣

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマ

ス、仍テ日程第十七、日本銀行法案、日程第

十八、戰時金融金庫法案、日程第十九、

臨時資金調整法中改正法律案、右三案ヲ一

括シテ第一讀會ヲ開キマス――賀屋大藏大

臣

第二條 日本銀行ハ專ラ國家目的ノ達成

ヲ使命トシテ運營セラルベシ

第三條 日本銀行ハ法令ノ定ムル所ニ依リ通貨及金融ニ關スル國ノ事務ヲ取扱

フモノトス

前項ノ事務ノ取扱ニ要スル經費ハ法令ノ定ムル所ニ依リ日本銀行ノ負擔トス

第四條 日本銀行ハ本店ヲ東京市ニ置ク

日本銀行ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケ必要ノ地ニ支店若ハ出張所ヲ設置シ又ハ主

務大臣ノ指定スル者ヲシテ業務ノ一部

ヲ代理セシムルコトヲ得

第五條 日本銀行ノ資本金ハ一億圓トシ

之ヲ百萬口ニ分チ一口ノ出資金額ヲ百

圓トス

政府ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ五千五百

萬圓ヲ日本銀行ニ出資スペシ

第六條 外國人、外國法人又ハ勅令ヲ以

テ定ムル帝國法人ハ日本銀行ノ出資者

之ヲ百萬口ニ分チ一口ノ出資金額ヲ百

圓トス

第七條 日本銀行ハ出資ニ對シ出資證券

ヲ發行ス

前項ノ出資證券ニ關シ必要ナル事項ハ

第八條 勅令ヲ以テ之ヲ定ム

出資者ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ

其ノ持分ヲ讓渡スコトヲ得

第九條 日本銀行ハ定款ヲ以テ左ノ事項

ヲ規定スベシ

一 目的

二 名稱

三 本店、支店及出張所ノ所在地

四 資本金額、出資及資產ニ關スル事項

五 役員ニ關スル事項

六 業務及其ノ執行ニ關スル事項

七 銀行券ノ發行ニ關スル事項

八 事業年度

九 經理ニ關スル事項

十 公告ノ方法

十一 定款ノ變更ハ主務大臣ノ認可ヲ受クル

ニ非ザレバ其ノ效力ヲ生ゼズ

第十條 日本銀行ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ登記ヲ爲スコトヲ要ス

前項ノ規定ニ依リ登記スベキ事項ハ登記ノ後ニ非ザレバ之ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得ズ

第十一條 日本銀行ニハ營業稅ヲ課セズニ關シテハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

日本銀行ニ付解散シタル場合ニ於テ拂込資本金額ヲ超ユル殘餘財產ハ國庫ニ歸屬ス

第十二條 日本銀行ニ付解散シタル場合ニ於テ其ノ處置ル事由發生シタル場合ニ於テ其ノ處置ニ關シテハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

日本銀行ノ解散シタル場合ニ於テ拂込資本金額ヲ超ユル殘餘財產ハ國庫ニ歸屬ス

第十三條 民法第四十四條、第五十條、第五十四條及第五十七條並ニ非訟事件手續法第三十五條第一項ノ規定ハ日本銀行ニ之ヲ準用ス

第二章 職員

第十四條 日本銀行ニ役員トシテ總裁副總裁各一人、理事三人以上、監事二人以上及參與若干人ヲ置ク

第五十五條 總裁ハ日本銀行ヲ代表シ其ノ業務ヲ總理ス

副總裁ハ總裁事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理シ總裁缺員ノトキハ其ノ職務ヲ行フ

第六條 副總裁及理事ハ總裁ヲ輔佐シ定款ノ定期ムル所ニ依リ日本銀行ノ業務ヲ掌理ス

監事ハ日本銀行ノ業務ヲ監查ス

シ意見ヲ述ブルコトヲ得

第十條 總裁及副總裁ハ勅裁ヲ經テ政務大臣之ヲ命ズ

府之ヲ命ズ

事務ハ總裁ノ諮詢ニ應ジ又ハ總裁ニ對

利子歩合ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受ク

日本銀行前項ノ認可ヲ受ケタルトキハ

其ノ旨ヲ公告スベシ

第二十二條 日本銀行ハ政府ニ對シ擔保

ハ學識經驗アル者ノ中ヨリ主務大臣之ヲ命ズ

參與ハ金融業若ハ産業ニ從事スル者又

理事ハ總裁ノ推薦シタル者ノ中ヨリ主務大臣之ヲ命ズ

監事ハ主務大臣之ヲ命ズ

役員ニ關スル事項

六 地金銀ノ賣買

七 手形ノ取立、保護預リ其ノ他前各

六 地金銀ノ賣買

七 手形ノ取立、保護預リ其ノ他前各

ヲ命ズ

總裁及副總裁ノ任期ハ五年、理事ノ任期ハ四年、監事ノ任期ハ三年、參與ノ任期ハ二年トス

第一條 日本銀行ハ國債ノ應募又ハ引受ヲ爲スコトヲ得

第二條 日本銀行ハ國際金融取引上必要アリト認ムルトキハ主務大臣ノ認ムルトキハ外國爲替ノ賣買ヲ爲スコトヲ得

第三條 日本銀行ハ必要アリト認ムル業務ヲ行フコトヲ得

第四條 日本銀行ハ總裁ハ日本銀行ノ目的達成上必要アリト認ムルトキハ銀行其ノ他ノ金融機關ニ對シ日本銀行ノ業務ニ協力セシムル爲必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

第五條 日本銀行ハ本法ニ規定セザル業務ヲ行フコトヲ得ズ但シ日本銀行ノ目的達成上必要アル場合ニ於テ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第六條 日本銀行ハ國庫金ノ取扱ヲ爲スベシ

第七條 日本銀行ハ本法ニ規定セザル業務ヲ行フコトヲ得ズ但シ日本銀行ノ目的達成上必要アリト認ムルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第八條 主務大臣ハ日本銀行ノ目的達成上必要アリト認ムルトキハ銀行其ノ他ノ金融機關ニ對シ日本銀行ノ業務ニ協力セシムル爲必要ナル命令ヲ爲スコトヲ得

第九條 日本銀行ハ銀行券ヲ發行ス

前項ノ銀行券ハ公私一切ノ取引ニ無制限ニ通用ス

第十條 主務大臣ハ前條第一項ノ銀行券ノ發行限度ヲ定ムベシ

主務大臣前項ノ發行限度ヲ定メタルトキハ之ヲ公示ス

第十一條 日本銀行ハ必要アリト認ムルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ主務大臣之ヲ命ズ

第一項ノ發行限度ヲ超エテ銀行券ヲ發行スルコトヲ得

第十二條 日本銀行ハ銀行券發行高ニ

主務大臣前項ノ發行限度ヲ定メタルトキハ主務大臣之ヲ命ズ

第一項ノ發行限度ヲ超エテ銀行券ヲ發行スルコトヲ得

第十三條 日本銀行ハ銀行券發行高ニ

主務大臣前項ノ發行限度ヲ定メタルトキハ主務大臣之ヲ命ズ

第一項ノ發行限度ヲ超エテ銀行券ヲ發行スルコトヲ得

第十四條 日本銀行ハ銀行券發行高ニ

主務大臣前項ノ發行限度ヲ定メタルトキハ主務大臣之ヲ命ズ

第一項ノ發行限度ヲ超エテ銀行券ヲ發行スルコトヲ得

第十五條 日本銀行ハ銀行券發行高ニ

主務大臣前項ノ發行限度ヲ定メタルトキハ主務大臣之ヲ命ズ

第一項ノ發行限度ヲ超エテ銀行券ヲ發行スルコトヲ得

第十六條 日本銀行ハ銀行券發行高ニ

主務大臣前項ノ發行限度ヲ定メタルトキハ主務大臣之ヲ命ズ

第一項ノ發行限度ヲ超エテ銀行券ヲ發行スルコトヲ得

第一項ノ發行限度ヲ超エテ銀行券ヲ發行スルコトヲ得

對シ同額ノ保證ヲ保有スルコトヲ要ス
前項ノ保證ハ左ノ各號ノ一二ニ該當スルモノナルコトヲ要ス

一 商業手形、銀行引受手形其ノ他ノ手形

二 第二十條第二號又ハ第二十二條第一項ノ規定ニ依ル貸付金

三 國債

四 第二十條第五號ノ主務大臣ノ認可ヲ受ケタル債券

五 外國爲替

六 地金銀(金銀貨ヲ含ム)

前項第一號、第二號及第五號ノ手形、貸付金及外國爲替ハ三月以内ニ満期ノ到来スルモノナルコトヲ要ス但シ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限り在ラズ

第二十四條ノ規定ニ依リ外國金融機關ニ對シ出資ヲ爲シタル場合其ノ他特別ノ必要アル場合ニ於テ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ第二項各號ニ該當セザル有價證券又ハ債權ヲ以テ第一項ノ保證ニ充ツルコトヲ得

日本銀行ハ第二項各號及前項ノ保證ノ價格ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受ケタベシ

第三十三條 銀行券ノ種類及様式ハ主務大臣之ヲ定ム

主務大臣前項ノ種類及様式ヲ定メタルトキハ之ヲ公示ス

第三十四條 日本銀行ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ銀行券發行高ヲ公告スベシ

第三十五條 日本銀行ハ主務大臣ノ定期所ニ依リ本店、支店又ハ出張所ニ於テ染汚、毀損其ノ他ノ事由ニ因リ通用シ難キ銀行券ヲ無手數料ニテ引換フベシ

第三十六條 日本銀行ハ銀行券ノ製造及銷却ノ手續ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第五章 經理

第三十七條 日本銀行ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ毎事業年度ノ經費ノ豫算ヲ定メ事業年度開始迄ニ之ヲ主務大臣ニ提出シ認可ヲ受クベシ之ニ重大ナル變更ヲ加ヘントストキ亦同ジ

第三十八條 日本銀行ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ毎事業年度ニ財產目錄、貸借對照表及損益計算書ヲ作成シ毎事業年度經過後二月以内ニ之ヲ主務大臣ニ提出シ承認ヲ受クベシ

第三十九條 日本銀行ハ每事業年度ニ準備金トシテ損失填补及配當準備ノ爲刺

餘金ノ二十分ノ一ヲ積立ツベシ

日本銀行ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケ前項ノ準備金ノ外目的ヲ定メ積立ヲ爲スコトヲ得

日本銀行ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケ剩餘金中ヨリ政府以外ノ者ノ出資ニ付拂込金額ニ對シ年四分ヲ下ラザル割合ノ配當ヲ爲スベシ但シ其ノ配當ハ五年分ノ割合ヲ超ユルコトヲ得ズ

政府ノ出資ニ付テハ剩餘金ノ配當ハ之ヲ爲サズ

日本銀行ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケ剩餘金中ヨリ第一項及第二項ノ規定ニ依ル準備金貯金第三項ノ規定ニ依ル配當金ヲ控除シタル殘額ヲ事業年度經過後二月以内ニ政府ニ納付スベシ

前項ノ規定ニ依ル納付金額ニ勅令ノ定期所ニ依リ法人税法ニ依ル所得及臨時利得稅法ニ依ル利益ノ計算上之ヲ損金ニ算入ス

日本銀行監理官ハ必要アリト認ムルトキハ何時ニテモ日本銀行ニ命ジ業務及財產ノ狀況ヲ報告セシムルコトヲ得

第四十六條 日本銀行監理官ハ何時ニテモ日本銀行ノ業務及財產ノ狀況ヲ検査スルコトヲ得

日本銀行監理官ハ必要アリト認ムルトキハ何時ニテモ日本銀行ニ命ジ業務及財產ノ狀況ヲ報告セシムルコトヲ得

第四十七條 日本銀行ノ役員ノ行爲ガ法令、定款若ハ主務大臣ノ命令ニ違反シタルトキ若ハ公益ヲ害シタルトキ又ハ日本銀行ノ目的達成上特に必要アリト認ムルトキハ總裁及副總裁ニ付テハ主務大臣之ヲ解任スルコトヲ得

第七章 奬罰

第四十八條 日本銀行ガ本法若ハ本法ニ基キテ發スル命令又ハ之ニ基キテ爲ス

失ヲ生ジタルトキヲ含ムハ政府ハ之ニ達セシムベキ金額ヲ補給スベシ

第四十九條 本法施行ノ期日ハ各條ニ付勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五十條 日本銀行條例ニ依ル日本銀行(以下舊日本銀行ト稱ス)ハ第五十一條

第五十一條 舊日本銀行ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ株券ノ名義書換ヲ停止スベシ

第五十二條 主務大臣ハ改組委員ヲ命ジテ命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

第五十三條 改組委員ハ定款ヲ作成シ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第五十四條 前條ノ認可アリタルトキハ改組委員ハ舊日本銀行ノ株式ニ對シ日本銀行ノ出資ヲ引當ツベシ

第五十五條 第五十三條ノ認可アリタルトキハ改組委員ハ遲滯ナク出資ノ引受け日本銀行ノ全額拂込済出資

前項ノ出資ノ引當ハ舊日本銀行ノ全額拂込済株式一株ニ付日本銀行ノ全額拂込済出資二口、舊日本銀行ノ未拂込株式一株ニ付日本銀行ノ全額拂込済出資

一口ノ割合ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ要ス

第五十六條 第五十四條第一項ノ引當及前條ノ引受ヲ了シタルトキハ其ノ際現ニ舊日本銀行ノ總裁、副總裁、理事及監事タル者ハ其ノ殘任期間ヲ限り各日

日本銀行ノ總裁、副總裁、理事及監事トシテ就職シタルモノト看做ス

第五十七條 第五十四條第一項ノ引當及前條ノ引受ヲ了シタルトキハ改

處分ニ違反シタルトキハ總裁又ハ總裁ノ職務ヲ行ヒ若ハ代理スル副總裁ヲ五千圓以下ノ過料ニ處ス副總裁又ハ理事ノ掌理スル業務ニ係ルトキハ副總裁又ハ理事ヲ過料ニ處スルコト亦同ジ

組委員ハ其ノ事務ヲ日本銀行總裁ニ引渡スベシ
第五十八條 日本銀行總裁前條ノ事務ノ引渡ヲ受ケタルトキハ本店ノ所在地ニ於テ成立ノ登記ヲ爲スベシ
日本銀行ハ前項ノ登記ヲ爲スニ因リテ成立ス

第五十九條 日本銀行ノ成立ニ因リ舊日本銀行ハ之ニ吸收セラルモノトシ舊日本銀行ノ一切ノ權利義務ハ日本銀行ニ於テ之ヲ承繼ス

第六十條 本法ニ規定スルモノヲ除クノ外舊日本銀行ガ日本銀行ト爲ルニ付必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六十一條 日本銀行條例、昭和十六年法律第十四號其ノ他ノ法令ニ依リテ爲ス
第六十二條 他ノ法令中舊日本銀行又ハ本法中之ニ相當スル規定アル場合ニ於テハ本法ニ依リテ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第六十三條 舊日本銀行ノ發行シタル兌換銀行券ハ本法ニ依リ日本銀行又ハシタル銀行券ト看做ス

日本銀行ハ當分ノ内第三十三條第一項ノ規定ニ拘ラズ舊日本銀行ノ發行シタル銀行券ト同一ノ種類及様式ノ銀行券ヲ本法ニ依ル銀行券トシテ發行スルコトヲ得

第六十四條 舊日本銀行ガ日本銀行ト爲シタル口數ノ日本銀行ノ全額拂込濟出資證券ト看做シタルトキハ舊日本銀行ノ全額拂込濟出資ハ一株ニ付二口ノ割合ヲ以テ計算シタル口數ノ日本銀行ノ全額拂込濟出資タリ口數ノ日本銀行ノ全額拂込濟出資證券ト看做ス

第六十五條 舊日本銀行ノ株式ヲ目的とする所スル皆權其ノ他ノ權利ハ其ノ株式ニ對シ引當テラタル出資ノ持分ノ上ニ存

第六十六條 舊日本銀行ガ日本銀行ト爲リタルトキハ日本銀行ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ遲滯ナク其ノ旨ヲ公告スベシ
第六十七條 日本銀行ガ第五十九條ノ規定ニ依リ舊日本銀行ヨリ不動產ニ關スル權利ヲ承繼スル場合ニ於ケル其ノ取得ニ付受クル登記ニ付テハ登錄稅ヲ課セズ

第五十九條 の規定ニ依ル舊日本銀行ヨリ日本銀行ヘノ有價證券ノ移轉ニ付テハ有價證券移轉稅ヲ課セズ

第六十八條 日本銀行ハ第五十四條第一項ノ規定ニ依リ日本銀行ノ出資者ト爲リタル者ニ對シ補償金ヲ交付スベシ
第六十九條 舊日本銀行ガ事業年度中ニ於ケル時價並ニ日本銀行成立ノ日ニ於ケル出資者ノ持分ノ價格ヲ參照シテ主務大臣之ヲ定ム

第七十條 第六十八條第一項ノ規定ニ依リ日本銀行補償審査委員會ノ組織及橢限ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
第一項ノ補償金ハ國債證券ヲ以テ之ヲ交付スルコトヲ得

第七十一條 舊日本銀行ガ事業年度中ニ於ケル剩餘金ノ配當ヲ爲スニ當リテハ舊日本銀行ノ株式ニ引當テタル出資ニ付テハ舊日本銀行ノ最初ノ事業年度ニ於ケル剩餘金ノ配當ヲ爲スニ當リテハ舊日本銀行ノ株式ニ引當テタル出資ニ付テハ舊日本銀行ノ最終ノ事業年度ニ於ケル利益ノ配當ハ之ヲ爲サズ但シ日本銀行ノ最

第七十二條 舊日本銀行ガ事業年度中ニ日本銀行ト爲リタル場合ニ於テハ第三十八條乃至第四十一條ノ規定ノ適用ニ付テハ舊日本銀行ノ最終ノ事業年度ノ初ヨリ日本銀行ノ最初ノ事業年度ノ終ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ日本銀行ノ一事業年度ト看做ス

第七十三條 登錄稅法中左ノ通改正ス

第七十四條 損益計算書ノ上ニ受クベシ之ニ重大ナル變更ヲ加ヘントスルトキ亦同ジ
第七十九條 第七號中「恩給金庫」ノ上ニスルトキハ日本銀行ガ日本銀行ト爲リタルトキハ日本銀行ノ遲滯ナク最初ノ事業年度ノ經費ノ豫算ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受ク
第一條 戰時金融金庫ハ戰時ニ際シ生產擴充及產業再編成等ノ爲必要ナル資金ニシテ他ノ金融機關等ヨリ供給ヲ受クルコト困難ナルモノヲ供給シ併セテ有價證券ノ市價安定ヲ圖ルコトヲ目的トス
第二條 戰時金融金庫ハ法人トス
第三條 戰時金融金庫ハ主タル事務所ヲ東京市ニ置ク

第四條 第六十五條第一項ノ規定ニ依リ出資ノ持分ノ上ニ存在スル質權其ノ他ノ權利效力ハ前條第一項ノ補償金ニ及

第五條 第四號ノ二ノ次ニ左ノ一號ヲ加

第六十九條 第六十五條第一項ノ規定ニ依リ出資ノ持分ノ上ニ存在スル質權其ノ他ノ權利效力ハ前條第一項ノ補償金ニ及

第七十條 第六十八條第一項ノ補償金ニ付テハ所得稅ヲ課セズ

第七十一條 舊日本銀行ガ事業年度中ニ於ケル剩餘金ノ配當ヲ爲スニ當リテハ舊日本銀行ノ株式ニ引當テタル出資ニ付テハ舊日本銀行ノ最初ノ事業年度ニ於ケル剩餘金ノ配當ヲ爲スニ當リテハ舊日本銀行ノ株式ニ引當テタル出資ニ付テハ舊日本銀行ノ最終ノ事業年度ニ於ケル利益ノ配當ハ之ヲ爲サズ但シ日本銀行ノ最

第七十二條 舊日本銀行ガ事業年度中ニ日本銀行ト爲リタル場合ニ於テハ第三十八條乃至第四十一條ノ規定ノ適用ニ付テハ舊日本銀行ノ最終ノ事業年度ノ初ヨリ日本銀行ノ最初ノ事業年度ノ終ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ日本銀行ノ一事業年度ト看做ス

第七十三條 登錄稅法中左ノ通改正ス

第七十四條 前項ノ規定ニ依リ交付スル國債證券ノ交價價格ハ時價ヲ參酌シテ主務大臣之ヲ定ム

第七十九條 第七號中「恩給金庫」ノ上ニスルトキハ日本銀行ガ日本銀行ト爲リタルトキハ日本銀行ノ遲滯ナク最初ノ事業年度ノ經費ノ豫算ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受ク
第一條 戰時金融金庫ハ戰時ニ際シ生產擴充及產業再編成等ノ爲必要ナル資金ニシテ他ノ金融機關等ヨリ供給ヲ受クルコト困難ナルモノヲ供給シ併セテ有價證券ノ市價安定ヲ圖ルコトヲ目的トス
第二條 戰時金融金庫ハ法人トス
第三條 戰時金融金庫ハ主タル事務所ヲ東京市ニ置ク

第四條 第六十五條第一項ノ規定ニ依リ出資ノ持分ノ上ニ存在スル質權其ノ他ノ權利效力ハ前條第一項ノ補償金ニ及

第五條 第四號ノ二ノ次ニ左ノ一號ヲ加

第六十九條 第六十五條第一項ノ規定ニ依リ出資ノ持分ノ上ニ存在スル質權其ノ他ノ權利效力ハ前條第一項ノ補償金ニ及

第七十條 第六十八條第一項ノ補償金ニ付テハ所得稅ヲ課セズ

第七十一條 舊日本銀行ガ事業年度中ニ於ケル剩餘金ノ配當ヲ爲スニ當リテハ舊日本銀行ノ株式ニ引當テタル出資ニ付テハ舊日本銀行ノ最初ノ事業年度ニ於ケル剩餘金ノ配當ヲ爲スニ當リテハ舊日本銀行ノ株式ニ引當テタル出資ニ付テハ舊日本銀行ノ最終ノ事業年度ニ於ケル利益ノ配當ハ之ヲ爲サズ但シ日本銀行ノ最

第七十二條 舊日本銀行ガ事業年度中ニ日本銀行ト爲リタル場合ニ於テハ第三十八條乃至第四十一條ノ規定ノ適用ニ付テハ舊日本銀行ノ最終ノ事業年度ノ初ヨリ日本銀行ノ最初ノ事業年度ノ終ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ日本銀行ノ一事業年度ト看做ス

第七十三條 登錄稅法中左ノ通改正ス

第七十四條 前項ノ規定ニ依リ交付スル國債證券ノ交價價格ハ時價ヲ參酌シテ主務大臣之ヲ定ム

第七十九條 第七號中「恩給金庫」ノ上ニスルトキハ日本銀行ガ日本銀行ト爲リタルトキハ日本銀行ノ遲滯ナク最初ノ事業年度ノ經費ノ豫算ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受ク
第一條 戰時金融金庫ハ戰時ニ際シ生產擴充及產業再編成等ノ爲必要ナル資金ニシテ他ノ金融機關等ヨリ供給ヲ受クルコト困難ナルモノヲ供給シ併セテ有價證券ノ市價安定ヲ圖ルコトヲ目的トス
第二條 戰時金融金庫ハ法人トス
第三條 戰時金融金庫ハ主タル事務所ヲ東京市ニ置ク

第四條 第六十五條第一項ノ規定ニ依リ出資ノ持分ノ上ニ存在スル質權其ノ他ノ權利效力ハ前條第一項ノ補償金ニ及

第五條 第四號ノ二ノ次ニ左ノ一號ヲ加

第六十九條 第六十五條第一項ノ規定ニ依リ出資ノ持分ノ上ニ存在スル質權其ノ他ノ權利效力ハ前條第一項ノ補償金ニ及

第七十條 第六十八條第一項ノ補償金ニ付テハ所得稅ヲ課セズ

第七十一條 舊日本銀行ガ事業年度中ニ於ケル剩餘金ノ配當ヲ爲スニ當リテハ舊日本銀行ノ株式ニ引當テタル出資ニ付テハ舊日本銀行ノ最初ノ事業年度ニ於ケル剩餘金ノ配當ヲ爲スニ當リテハ舊日本銀行ノ株式ニ引當テタル出資ニ付テハ舊日本銀行ノ最終ノ事業年度ニ於ケル利益ノ配當ハ之ヲ爲サズ但シ日本銀行ノ最

第七十二條 舊日本銀行ガ事業年度中ニ日本銀行ト爲リタル場合ニ於テハ第三十八條乃至第四十一條ノ規定ノ適用ニ付テハ舊日本銀行ノ最終ノ事業年度ノ初ヨリ日本銀行ノ最初ノ事業年度ノ終ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ日本銀行ノ一事業年度ト看做ス

第七十三條 登錄稅法中左ノ通改正ス

トシ之ヲ三百萬口ニ分チ一口ノ出資金額ヲ百圓トス
但シ資本金ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ増加スルコトヲ得
第四條 戰時金融金庫ハ出資ニ對シ出資證券ヲ發行ズ
出資證券ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
第五條 政府ハ二億圓ヲ限リ戰時金融金庫ニ出資スルコトヲ得
前項ノ出資ハ國債證券ヲ交付シテ之ヲ爲スコトヲ得
前項ノ規定ニ依リ交付スル國債證券ノ交換價格ハ時價ヲ參照シテ大藏大臣之ヲ定ム
第六條 戰時金融金庫ノ出資者ノ責任ハ其ノ出資額ヲ限度トス
出資者ハ戰時金融金庫ニ拂込ムベキ出資額ニ付相殺ヲ以テ之ニ對抗スルコトヲ得ズ
第七條 出資者ハ戰時金融金庫ノ承認ヲ經テ其ノ持分ヲ讓渡スコトヲ得
第八條 拂込ヲ怠リタル出資者ニ對シ戦時金融金庫ガ一月以上ノ相當ノ期間ヲ定メ拂込ノ請求ヲ爲シタルニ拘ラズ出資者ガ拂込ヲ爲サルトキハ戰時金融庫ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケ其ノ出資者ノ持分ヲ處分スルコトヲ得
戰時金融金庫ハ持分ノ處分ニ依リテ得タル金額ヨリ滯納金額及定款ヲ以テ定期ムル違約金ノ額ヲ控除シタル金額ヲ從前ノ出資者ニ拂戻スコトヲ得
濟ヲ請求スルコトヲ得

第三章 職務所ノ所在地
第四章 資本金額及資産ニ關スル事項
第五章 役員ニ關スル事項
第六章 業務及其ノ執行ニ關スル事項
第七章 會計ニ關スル事項
第八章 公告ノ方法
第九章 定款ノ變更ハ主務大臣ノ認可ヲ受クル
第十章 戰時金融債券ノ發行ニ關スル事項
第十一章 戰時金融債券ニ付解散ヲ必要トスル事由發生シタル場合ニ於テ其ノ處置ニ關シテハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム
第十二條 戰時金融金庫ニ非ザル者ハ戰時金融金庫又ハ之ニ類似スル名稱ヲ用フルコトヲ得ズ
第二章 職員
第十三條 戰時金融金庫ニ役員トシテ總裁副總裁各一人、理事五人以上、監事二人以上及評議員若干人ヲ置ク

第十四條 總裁ハ戰時金融金庫ヲ代表シ其ノ業務ヲ總理ス
副總裁ハ定款ノ定ムル所ニ依リ戰時金融金庫ヲ代表シ總裁ヲ輔佐シテ
總裁共ニ事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理シ總裁及副總裁又ハ副總裁共ニ缺員ノトキハ其ノ職務ヲ行フ
理事ハ定款ノ定ムル所ニ依リ戰時金融金庫ヲ代表シ總裁及副總裁ヲ輔佐シテ
戰時金融金庫ノ業務ヲ掌理シ總裁及副總裁共ニ事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理シ總裁及副總裁共ニ缺員ノトキハ其ノ職務ヲ行フ
監事ハ戰時金融金庫ノ業務ヲ監査ス
評議員ハ戰時金融金庫ノ業務ニ關スル重要事項ニ付總裁ノ諮詢ニ應ジ又ハ總裁ニ對シ意見ヲ述ブルコトヲ得
總裁ハ主務大臣ノ定ムル事項ニ付テハ
評議員ニ諮詢スルコトヲ要ス
監事ハ戰時金融金庫ノ業務ヲ監査ス
評議員ハ政府之ヲ命バ
總裁、副總裁及理事ノ任期ハ四年、監事及評議員ノ任期ハ二年トス
第十五條 總裁、副總裁、理事、監事及評議員ハ政府之ヲ命バ
總裁、副總裁及理事ノ任期ハ四年、監事及評議員ノ任期ハ二年トス
第十六條 總裁、副總裁及理事ハ定款ノ定ムル所ニ依リ從タル事務所ノ業務ニ關シ一切ノ裁判上又ハ裁判外ノ行為ヲ爲ス權限ヲ有スル代理人ヲ選任スルコトヲ得
第十七條 總裁、副總裁及理事ハ他ノ職業ニ從事スルコトヲ得ズ但シ主務大臣ノ認可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十八條 戰時金融金庫ノ職員ハ之ヲ法令ニ依リ公務ニ從事スル職員ト看做ス
前項ノ職員ノ範圍ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
第十九條 戰時金融金庫ハ左ノ業務ヲ行
第二十條 戰時金融金庫ハ拂込資本金額ノ十倍ヲ限リ戰時金融債券ヲ發行スルコトヲ得
第二十一條 戰時金融債券ハ額面金額五十圓以上トシ無記名利札附トス但シ應募者又ハ所有者ノ請求ニ依リ記名式ト爲スコトヲ得
戰時金融債券ハ割引ノ方法ヲ以テ之ヲ發行スルコトヲ得
第二十二條 戰時金融金庫ハ戰時金融債券借換ノ爲一時第二十條ノ制限ニ依ラズ戰時金融債券ヲ發行スルコトヲ得
前項ノ規定ニ依リ戰時金融債券ヲ發行シタルトキハ發行後一月内ニ其ノ發行額面金額ニ相當スル舊戰時金融債券ヲ償還スベシ

第二十三條 政府ハ戰時金融債券ノ元本ノ償還及利息ノ支拂ヲ保證スルコトヲ得

第二十四條 戰時金融金庫ニ於テ戰時金融債券ヲ發行セントスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第二十五條 戰時金融債券ノ消滅時效ハ元本ニ在リテハ十五年、利息ニ在リテハ五年ヲ以テ完成ス

第二十六條 所得稅法及有價證券移轉稅法中國債以外ノ公債ニ關スル規定ハ戰時金融債券ニ之ヲ準用ス

第二十七條 本章ニ規定スルモノヲ除クノ外戰時金融債券ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五章 會計及補助

第二十八條 戰時金融金庫ノ事業年度ハ四月ヨリ翌年三月迄トス

第二十九條 戰時金融金庫ハ設立ノ時及毎事業年度ノ初ニ於テ財產目錄、貸借對照表及損益計算書ヲ作成シ款ト共ヲ得ズ

一 國債又ハ地方債ノ取得

二 大藏省預金部若ハ銀行ヘノ預金又ハ郵便貯金

第三十條 戰時金融金庫剩餘金ノ處分ヲ爲サントスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第三十一條 戰時金融金庫ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ剩餘金中ヨリ準備金ノ積立ヲ爲スベシ

第三十二條 戰時金融金庫ノ每事業年度ニ於ケル配當シ得ベキ剩餘金額ガ政府以外ノ出資者ノ拂込出資金額ニ對シ年百分ノ五割合ニ達セザルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第三十三條 戰時金融金庫ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ剩餘金中ヨリ準備金ノ積立ヲ爲スベシ

第三十四條 戰時金融金庫ノ每事業年度ニ於ケル配當シ得ベキ剩餘金額ヲ含ムハ政府ハ之ニ達セシムベキ金額ヲ補給スベシ

金額ガ政府以外ノ出資者ノ拂込出資金額ニ對シ年百分ノ五割合ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ハ先づ之ヲ前項ノ規定ニ依ル補給金ノ償還ニ充ツベシ

第二十條 戰時金融金庫ハ主務大臣之備ノ爲積立デタル金額ハ後事業年度ニ於ケル第一項ノ規定ニ依ル補給金ノ計算ニ付テハ之ヲ配當シ得ベキ剩餘金ト看做ス

第二十一條 戰時金融金庫ハ每事業年度ノ外戰時金融債券ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十二條 會計及補助

第二十三條 戰時金融金庫ノ事業年度ハ四月ヨリ翌年三月迄トス

第二十四條 戰時金融金庫ハ設立ノ時及毎事業年度ノ初ニ於テ財產目錄、貸借對照表及損益計算書ヲ作成シ款ト共ヲ得ズ

一 國債又ハ地方債ノ取得

二 大藏省預金部若ハ銀行ヘノ預金又ハ郵便貯金

第三十條 戰時金融金庫ハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第三十一條 戰時金融金庫剩餘金ノ處分ヲ爲サントスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第三十二條 戰時金融金庫ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ剩餘金中ヨリ準備金ノ積立ヲ爲スベシ

第三十三條 戰時金融金庫ノ每事業年度ニ於ケル配當シ得ベキ剩餘金額ガ政府以外ノ出資者ノ拂込出資金額ニ對シ年百分ノ五割合ニ達セザルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ

第三十四條 戰時金融金庫ノ每事業年度ニ於ケル配當シ得ベキ剩餘金額ヲ含ムハ政府ハ之ニ達セシムベキ金額ヲ補給スベシ

法ニ依ル利益ノ計算上之ヲ益金ニ算入セズ

第六章 監督

第三十九條 戰時金融金庫ハ主務大臣之目的達成上必要アリト認ムルトキハ

第三十八條 主務大臣ハ戰時金融金庫ノ必要ナル業務ノ施行ヲ命ジ又ハ定期ノ變更其ノ他必要ナル事項ヲ命ズルコトヲ得

第三十九條 戰時金融金庫ハ業務開始ノ際業務ノ方法ヲ定メ主務大臣ノ認可ヲ受クベシ之ヲ變更セントスルトキ亦同

第四十條 主務大臣ハ戰時金融金庫ニ對シ業務及財產ノ狀況ニ關シ報告ヲ爲サ

第四十一條 主務大臣ハ戰時金融金庫監理官ヲ置キ戰時金融金庫ノ業務ヲ監視

第四十二條 戰時金融金庫監理官ハ何時ニテモ戰時金融金庫ノ業務及財產ノ狀況ヲ檢查ヲ爲シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

第四十三條 戰時金融金庫監理官ハ何時ニテモ戰時金融金庫ノ業務及財產ノ狀況ヲ報告セシム

第四十四條 戰時金融金庫ノ役員ガ法令、定款若ハ主務大臣ノ命令ニ違反シ又ハ公益ヲ害スル行為ヲ爲シタルトキハ政府ハ之ヲ解任スルコトヲ得

第四十五條 主務大臣ハ必要アリト認ムルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ左ノ各號ニ掲グル者ヨリ其ノ業務及財產ノ狀況ニ關シ報告ヲ徵シ又ハ當該官吏ヲシテ其ノ業務ノ狀況若ハ帳簿書類其ノ他物件ヲ検査セシムルコトヲ得

第四十六條 前條ノ規定ニ違反シ報告ヲ爲サズ若ハ虛偽ノ報告ヲ爲シ又ハ検査ヲ拒ミ妨が若ハ忌避シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第四十七條 左ノ場合ニ於テハ戰時金融金庫ノ總裁、副總裁、理事又ハ監事ヲ千圓以下ノ過料ニ處ス

第四十八條 本法ニ依リ主務大臣ノ認可ヲ受クベキ場合ニ於テ其ノ認可ヲ受ケザルトキ

第四十九條 主務大臣ハ必要アリト認ムルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ法人稅法ニ依ル純益及臨時利得稅法ニ依ル

第五十條 第三十條ノ規定ニ違反シ業務ニ因リテ受ケタル損失ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノ及其ノ額

第五十一條 第三十六條 戰時金融金庫ガ第三十三條ノ規定ニ依ル業務ニ因リテ受ケタル損失ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノ及其ノ額

第五十二條 第四十四條 戰時金融金庫ガ第十九條ノ規定ニ依ル業務ヲ行爲ヲ爲シ又ハ償還ヲ爲サザルトキ

第五十三條 第三十二條 又ハ第二十二條第二項ノ規定ニ依リ出資又ハ社債ノ保有ヲ爲ス場合ニ於テ之ヨリ生ズル甲種ノ配當利子所得ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ分類所得税ヲ課セズ戰時金融金庫ガ同條第

第五十四條 第四十五條 第三十六條 戰時金融金庫ガ第三十三條ノ規定ニ依ル業務ニ因リテ受ケタル損失ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノ及其ノ額

第五十五條 第三十七條 第三十八條 又ハ公債ヲ害スル行為ヲ爲シタルトキハ政府ハ之ヲ解任スルコトヲ得

第五十六條 第三十九條 第四十條 第三十九條ノ規定ニ依リ受クル補給金ハ命

第五十七條 第四十條 第四十條ノ規定ニ依リ受クル補給金ハ命

第五十八條 第四十條 第四十條ノ規定ニ依リ受クル補給金ハ命

第五十九條 第四十條 第四十條ノ規定ニ依リ受クル補給金ハ命

第六十條 第四十條 第四十條ノ規定ニ依リ受クル補給金ハ命

第六十一條 第四十條 第四十條ノ規定ニ依リ受クル補給金ハ命

第六十二條 第四十條 第四十條ノ規定ニ依リ受クル補給金ハ命

六 第四十二條ノ規定ニ依ル戰時金融庫監理官ノ検査ヲ拒ミ、妨ガ若ハ
忌避シ又ハ其ノ命ズル報告ヲ爲サザ
ルトキ
第四十八條 左ノ場合ニ於テハ戰時金融庫ノ總裁、副總裁、理事又ハ監事ヲ
五百圓以下ノ過料ニ處ス
一本法又ハ本法ニ基キテ發スル勅令
ニ違反シ登記ヲ爲スコトヲ怠リ又ハ
不正ノ登記ヲ爲シタルトキ
二 第二十九條ノ規定ニ依ル書類ヲ備
置カザルトキ又ハ其ノ書類ニ記載ス
ベキ事項ヲ記載セズ若ハ不正ノ記載
ヲ爲シタルトキ
第四十九條 第十二條ノ規定ニ違反シ戰時金融庫又ハ之ニ類似スル名稱ヲ用
ヒタル者ハ千圓以下ノ過料ニ處ス

附 則

第五十條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ
之ヲ定ム
第五十一條 政府ハ設立委員ヲ命ジ戰時金融庫ノ設立ニ關スル事務ヲ處理セシム
第五十二條 日本協同證券株式會社ハ命
令ノ定ムル所ニ依リ商法第三百四十三
條ニ定ムル株主總會ノ決議ヲ以テ戰時
金融庫ニ吸收セラルコトヲ得
日本協同證券株式會社前項ノ決議ヲ爲
シタルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受ケベ
シ
第五十三條 設立委員ハ定款ヲ作成シ主
務大臣ノ認可ヲ受クベシ
第五十四條 前條ノ認可アリタルトキハ
設立委員ハ總出資ヨリ政府ニ割當ツベ
キ出資及日本協同證券株式會社ノ株式
ニ引當ツベキ出資ヲ控除シタル殘餘ノ
出資ニ付出資者ヲ募集スベシ
前項ノ出資ノ引當ハ日本協同證券株式
會社ノ株式ニ付戦時金融庫ノ半

額拂込済出資一口ノ割合ヲ以テ之ヲ爲
スコトヲ要ス
第五十五條 設立委員ハ前條第一項ノ募
集ヲ終リタルトキハ出資申込書ヲ主務
大臣ニ提出シ設立ノ認可ヲ申請スベシ
前項ノ認可ヲ受ケタルトキハ設立委員
ハ遲滞ナク日本協同證券株式會社ノ株
式ニ引當ツベキ出資以外ノ出資ニ付第
一回ノ拂込ヲ爲サシムルコトヲ要ス
第五十六條 前條第二項ノ拂込完了シタ
ルトキハ設立委員ハ遲滞ナク其ノ事務
ヲ戰時金融庫總裁ニ引渡スベシ
戦時金融庫總裁前項ノ事務ノ引渡ヲ
受ケタルトキハ總裁、副總裁、理事
及監事ノ全員ハ設立ノ登記ヲ爲スベ
シ
戰時金融庫ハ前項ノ登記ヲ爲スニ因
リテ成立ス
第五十七條 戰時金融庫ノ成立ニ因リ
日本協同證券株式會社ハ之ニ吸收セラ
ルルモトシ日本協同證券株式會社ノ
權利義務ハ戰時金融庫ニ於テ之ヲ承
繼ス
第五十八條 日本協同證券株式會社ノ株
式ヲ目的トスル質權其ノ他ノ權利ハ其
ノ株式ニ對シ引當テラレタル出資ノ持
分ノ上ニ存在ス
第五十九條 第五十七條ノ規定ニ依ル日
本協同證券株式會社ヨリ戰時金融庫
ヘノ有價證券ノ移轉ニ付テハ有價證券
移轉稅ヲ課セズ

第六十條 本法ニ規定スルモノヲ除クノ
事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
第六十一條 第五十二條第一項ノ決議ナ
キ場合又ハ其ノ決議ガ效力ヲ生ゼザ
ル場合ニ於テハ戰時金融庫ノ設立ニ關
シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定
ム
第六十二條 登錄稅法中左ノ通改正ス
債券ニ付登記ヲ受クルトキハ左ノ區
別ニ從ヒ登錄稅ヲ納ムヘシ
一 戰時金融債券ノ拂込
額拂込済出資一口ノ割合ヲ以テ之ヲ爲
スコトヲ要ス
第五十五條 設立委員ハ前條第一項ノ募
集ヲ終リタルトキハ出資申込書ヲ主務
大臣ニ提出シ設立ノ認可ヲ申請スベシ
前項ノ認可ヲ受ケタルトキハ設立委員
ハ遲滞ナク日本協同證券株式會社ノ株
式ニ引當ツベキ出資以外ノ出資ニ付第
一回ノ拂込ヲ爲サシムルコトヲ要ス
第五十六條 前條第二項ノ拂込完了シタ
ルトキハ設立委員ハ遲滞ナク其ノ事務
ヲ戰時金融庫總裁ニ引渡スベシ
戦時金融庫總裁前項ノ事務ノ引渡ヲ
受ケタルトキハ總裁、副總裁、理事
及監事ノ全員ハ設立ノ登記ヲ爲スベ
シ
戰時金融庫ハ前項ノ登記ヲ爲スニ因
リテ成立ス
第五十七條 戰時金融庫ノ成立ニ因リ
日本協同證券株式會社ハ之ニ吸收セラ
ルルモトシ日本協同證券株式會社ノ
權利義務ハ戰時金融庫ニ於テ之ヲ承
繼ス
第五十八條 日本協同證券株式會社ノ株
式ヲ目的トスル質權其ノ他ノ權利ハ其
ノ株式ニ對シ引當テラレタル出資ノ持
分ノ上ニ存在ス
第五十九條 第五十七條ノ規定ニ依ル日
本協同證券株式會社ヨリ戰時金融庫
ヘノ有價證券ノ移轉ニ付テハ有價證券
移轉稅ヲ課セズ

第六十條 本法ニ規定スルモノヲ除クノ
事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
第六十一條 第五十二條第一項ノ決議ナ
キ場合又ハ其ノ決議ガ效力ヲ生ゼザ
ル場合ニ於テハ戰時金融庫ノ設立ニ關
シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定
ム
第六十二條 登錄稅法中左ノ通改正ス
債券ニ付登記ヲ受クルトキハ左ノ區
別ニ從ヒ登錄稅ヲ納ムヘシ
一 戰時金融債券ノ拂込
額拂込済出資一千圓以下ノ罰金ヲ「二十
圓」ヲ「三十圓」ニ改ム
二 登記事項ノ變更、消滅又ハ廢止
拂込金額 千分ノ一
每一件 金十圓
從タル事務所ノ所在地ニ於テ前項各號
ノ登記ヲ受クルトキハ每一件金三圓
ノ登錄稅ヲ納ムヘシ
二 戰時金融債券ノ拂込
額拂込済出資一千圓以下ノ罰金ヲ「二十
圓」ヲ「三十圓」ニ改ム
三 戰時金融庫ノ設立ノ第一項ニ左ノ如ク改ム
但シ日本勸業銀行法第三十五條ノ二第
一項中二十圓トアルハ三十圓トス
第十九條第七號中「庶民金庫」ノ下ニ
「戰時金融庫」ヲ「庶民金庫法」ノ
下ニ「戰時金融庫法」ヲ加フ
第六十三條 印紙稅法中左ノ通改正ス
第五條第六號ノ三ノ次ニ左ノ一號ヲ加
フ
第六ノ三ノ二 戰時金融債券及戰時金
融庫ノ發スル出資證券
第六十四條 有價證券業取締法中左ノ通
改正ス
第一條中「及有價證券割賦販賣業者」ヲ
「有價證券割賦販賣業者」ヲ
庫」ニ改ム
臨時資金調整法中改正法律案
臨時資金調整法中左ノ通改正ス
第一條中「商工組合中央金庫」ノ下ニ、「戰
時金融庫」ヲ加フ
第六條第一項中「二十億圓」ヲ「五十億圓」
ニ改メ同條第四項中「額面金額二十億圓」
ヲ限リ「ヲ削ル
第七條ノ一 商工組合中央金庫ハ五千萬
圓ヲ限り商工組合中央金庫法第三十一
條ノ規定ニ依ル制限ヲ超エテ債券ヲ發
行スルコトヲ得
第八條中「前二條」ヲ「前三條」ニ改ム
第十九條中「前二條」ヲ「前三條」ニ改ム
第二十條中「千圓以下ノ罰金」ヲ「二年以
下ノ懲役又ハ二千圓以下ノ罰金」ニ改ム
第三十條中「三十圓」ニ改ム
附 則
本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
有價證券移轉稅法第九條第二號中「二十
圓」ヲ「三十圓」ニ改ム
附 則
商工組合中央金庫ハ其ノ債券借換ノ爲
債券ヲ發行スル場合ニ於テハ前項ノ制
限ニ依ラザルコトヲ得
○國務大臣 (賀屋興宣君登壇)
商工組合中央金庫法第三十三條ノ規定
(國務大臣賀屋興宣君登壇) 只今議題トナリ

マシタ日本銀行法案外二件ニ付キマシテ其ノ提案ノ理由ヲ説明致シマス
先づ日本銀行法ニ付キマシテ説明申上ゲマス、我ガ國通貨竝ニ金融制度ノ中核ニアリマスル日本銀行ヲシテ、中央發券銀行トシテ國家經濟總力ノ適切ナル發揮ヲ圖ル爲メ、政府ト一體的關係ニ立チマシテ通貨ノ調節、金融ノ調整及び信用制度ノ保持育成ニ任ゼシム得ル、ガ如キ體制ヲ整備致シマシテ、以テ大東亜戰爭ノ完遂ト高度國防國家體制ノ完成ニ資シ、進ンデハ大東亜共榮圈ノ確立ト將來久シキニ瓦ル是ガ維持發展ニ寄與セシムルコトハ、刻下緊急ノ要事ト信ズルノデアリマス

之ヲ爲スコト致シタノデアリマヌ、又日本銀行ノ運營ハ専ラ國家目的ノ達成ヲ使命トシテ行ハルベキモノデアリマスルカラ、同行役員ノ責任、任免等ニ關スル規定ヲ之ニ適應スル如ク改正スルト共ニ、同行ノ職員ハ總テ之ヲ公務員ト看做スコト致シタノデアリマス。

次ニ現在日本銀行ノ業務ハ、制度上國內商業金融ノ調整ヲ中心ト致シテ居リマスルガ、其ノ範圍ヲ擴充致シマシテ、右ノ外更ニ産業金融ニ付テモ進ンデ是ガ調整ヲ圖リ、金融市場操作モ之ヲ積極的ニ行ヒ、國際金融取引ニモ積極的ニ關與スルト共ニ、更ニ我國信用制度ノ保持育成ニ當ルコトヲモ日ガ民元ニ及ベ、ノリヨミ文ノフコトアリ。

ニ依リ補償金ヲ交付セシムルコト致シタ
ノデアリマス

最後ニ、現行ノ日本銀行關係ノ諸法規ハ
其ノ體裁ガ新舊多様デアリマシテ調和ヲ缺
キ、是等ノ全體ヲ通じテ日本銀行制度ノ内
容ヲ綜合的ニ且ツ明確ニ而解スル上ニ甚ダ
シク不備デアリマス、仍テ是等諸法規ノ統
合整理ヲ行フコトヲ適當ト認メタノデアリマ
ス、本法案ノ要點ハ以上申述ベタ通りデ
アリマシテ、之ニ依リ今後日本銀行ハ我が
國中央發券銀行ト致シマシテ遺憾ナク其ノ
使命ヲ果シ得ルコトトナリ、又嗣家ノ同行
ニ對シテ與フル無限ノ援助ト相俟ツテ、同行
ノ信用ノ基礎ハ愈々鞏固ヲ加ヘ、同行ハ新

等ノ國家緊要事業ニアリマシテ、現状ニ於テハ駁谷性ノ見透シノ困難ナル事業ヲ營ミマスルモノ、或ハ國家ノ緊要トスル重要物資ヲ貯藏スル者等ニ對シマシテ、從來ノ融方法ヲ以テシテハ調達困難ナル資金ヲ供給致シ、併セテ市價安定ノ爲ニスル有價証券ノ賣買ヲ行ハシメ、時局下ニ於テ必要ナル資金ノ供給ヲ圓滑ニシ、以テ戰時經濟ノ運營ニ遺憾ナキヲ期セントスルモノニアリマス、尙ホ右ノ如キ本金庫ノ性質ニ鑑ミマシテ、本機關ノ發行スル債券ニ對シテハ、其ノ元本ノ償還及び利息ノ支拂ニ付キマシテ政府之ガ保證ヲナシ得ルコトト致シ、又本金庫ノ受ケタル損失ハ政府ニ於テ之ヲ補

折 現行ノ日本銀行新規ハソレ、明治十五年及ビ同十七年ノ制定ニ係ル日本銀行條例及ビ兌換銀行券條例ヲ基本ノ法律ト致シテ居ルノデアリマシテ、其ノ後若干ノ修正ヲ加ヘラレテ參ツタノデアリマスガ、其ノ基本的建前ハ殆ド六十年前ト何等變更セラルコトナク今日ニ及ンデ居ルノデアリマス、其ノ結果今ヤ日本銀行ノ現行制度ハ、同行運營ノ實際ニ副ハザルニ至リマシタノミナラズ、今後其ノ使命ヲ全ウセシムル爲ニハ少カラズ障碍トナルノデアリマス、仍テ茲ニ日本銀行制度ノ全般ニ亘リ根本的改正ヲ行フコトト致シタ次第デアリマス、是ヨリ本法案ノ主ナル點ニ付キ説明ヲ申上ゲマス

先づ第一ニ、現在日本銀行ハ一種ノ株式會社組織ニアリマスルガ、同行ノ公的性質ガ愈々濃厚トナルニ伴ヒマシテ、其ノ使命ノ遂行ニ遺憾ナカラシムルガ爲メ、之ヲ強度ノ公的性質ヲ有スル特殊法人トスルヲ適當ト認メタノデアリマス

次ニ日本銀行ノ資本金ハ之ヲ一億圓ニ増加シマスルト共ニ、現在ノ拂逃資本金四千五百万圓ノ外五千五百万圓ヲ政府ニ於テ出資シ、是ガ實際ノ拂込ハ今後必要ニ應ジテ

本銀行ノ業務トシテ規定シタノアリベ
又現行ノ兌換銀行券條例ニ基ク發券制度ハ、
本金位制度ヲ基礎トスルモノデアリマシテ、
今日右ノ制度ハ全ク其ノ意義ヲ喪失スルニ
至リマシタ爲メ、昨年法律第十四號ヲ以テ
之ニ代ル制度ヲ設ケタノデアリマスルガ、
同法ハ臨時的ニ特例ニ止マルモノデアリマ
スカラ、之ニ代ヘ管理通貨制度ヲ基礎トス
ル恒久的ナル新券券割度ヲ設クルコトト致
シタノデアリマス

次ニ日本銀行ヲ公的組織トスルニ伴ヒ、政
府ハ政府以外ノ出資者ニ對シ年四分ノ配當
ヲ保證スルコトト致シ、併而剩餘金ヨリ出資
者ニ對スル年五分ヲ超エザル配當及ビ所定
ノ積立金此ノ兩者ヲ引去リマシタル殘餘ハ
之ヲ擧ゲテ國庫ニ納付セシムルコトヲ適當
ト認メタノデアリマス、尙ホ今回ノ日本銀
行ノ改組ニ當リマシテハ、現在ノ日本銀行
ノ権利義務、其ノ他一切ノ法律關係ハ其ノ
儘新日本銀行ニ於テ之ヲ繼承シ、又改組ノ
際ニ於ケル同行ノ株主ハ其ノ儘新日本銀行
ノ出資者トナルコトト致シタノデアリマス、
併シ右出資者ニ對シマシテハ、此ノ改組ニ
依リ損害ヲ蒙ルコトナカラシムル必要ガア
リマスルノデ、日本銀行ヲシテ適正ナル基準

シギ重態ニ相應ハシキ中央商券銀行トナル
モノト確信致ス次第アリマス
次ニ戰時金融金庫法案ニ付キ説明申上ガ
マス、大東西戦争ノ完遂ヲ期シマスル爲メ、
生産ノ重點的擴充及ビ産業ノ再編成等ハ愈々
愈々緊要務トナツテ參ツタノデアリマシ
テ、其ノ爲メ必要ナル資金ノ需要ハ、今後
一層増大スルモノト考ヘラレルノデアリマス
ス、而シテ此ノ種ノ資金ヲ潤滑ニ供給シテ
參リマスルコトハ、即ち經濟ノ運營上必
要ナル資金ノ供給ヲ圓滑ニシテアリマス
ル也、在來ノ金融機關等ヨリ通常
常ノ方法ヲ以テ致シマシテハ其ノ供給ヲ期
待スルコトガ相當困難モノガ少クナイノ
デアリマス、隨テ此ノ種ノ資金ノ供給ヲ圓
滑ニ致シマスル爲ニハ、徒ラニ企業ノ危険
性ヲ顧慮シ躊躇スルコトナク、必要ナ資金ヲ
供給シ得ル仕組ノ機關ヲ設ケマシテ、之ニ
従来ノ金融的方法ヲ以テシテハ供給困難ナ
ル資金ノ分野ヲ擔當セシムルコトガ刻下ノ
急務デアルト考ヘルノデアリマス、又之ニ
依リマシテ他ノ一般金融機關ノ健全ナル運
營ニモ貢獻スルコトガ出來ルト考ヘルノデ
アリマス、仍テ此ノ際特殊法人タル戰時金
融金庫ヲ設立シ、軍需產業、生產擴充產業

次ニ時局ニ要請ニ顧ミ、土地其ノ他ノチ
シタノデ、此ノ際兩債券ノ發行限度ヲ擴張
致シマスルト共ニ、其ノ消化促進ヲ圖ル爲
メ、貯蓄債券ノ券面金額ノ引上ラナシ、又
報國債券ノ毎年ノ抽籤回數ニ關スル制限ヲ
撤廢スルコトガ適當デアルト認メラレルノ
デアリマス

次ニ臨時資金調整法中改正法律案ニ付キ
證明致シマス、支那事變ニ進展ニ伴ヒマシ
テ生産力擴充資金其ノ他時局ニ緊要ナル資
金ノ中、日本興業銀行及比南工組合中央全
庫ニ於テ供給すべキ金額ハ、今後一層増加
スルモノト認ヌラレルノデアリマスルガ、
其ノ爲ニハ資金ノ調達ノ限度ヲ增大シ、川
テ時局金融ニ支障ナカラシメンガ爲メ、興
業債券及比商工債券ノ發行限度並ニ興業債
券ノ元利金ノ支拂ニ付キ政府ニ於テ保證シ
得ル限度ヲ擴張スルノ必要ガアリマス

次ニ現下ノ經濟事情ニ顧ミマスルニ、餘
剩購買力ノ吸收ト、國民貯蓄ノ增加トノ必
要ハ益々緊要ナルモノガアリマスル所、其ノ
最モ有效ナル手段ノ一デアリマスル貯蓄債
券及ビ報國債券ノ發行餘力ハ少額トナリマ
シタノデ、此ノ際兩債券ノ發行限度ヲ擴張
致シマスルト共ニ、其ノ消化促進ヲ圖ル爲
メ、貯蓄債券ノ券面金額ノ引上ラナシ、又
報國債券ノ毎年ノ抽籤回數ニ關スル制限ヲ
撤廢スルコトガ適當デアルト認メラレルノ
デアリマス

官報號外
昭和十七年一月二十三日

衆議院議事速記錄第四號

日本銀行法案外二件

第一讀會

ノヲ收用セラレ、又ハ賣却シタル者ナドガ、

其ノ代償トシテ受クル金錢ヲ以テ國債等ノ
有價證券ヲ購入保有セシメマスルコトハ、

資金蓄積上必要トスル場合ガ多イト考ヘラ
レマスルノデ、從來モ此ノ方針ニ依リマシ

テ是ガ購入方ヲ勧致シテ參ツタノデアリ
マスルガ、今般更ニ必要アル場合ニハ其ノ
購入保有等ニ付キ、必要ナル命令ヲ發シ得
ルノ途ヲ開ク要アルモノト認メラレルノデ
アリマス

次ニ昨年十二月十一日公布セラレマシタ
企業許可令ノ違反ニ付キマシテハ、國家總
動員法ニ基ク罰則ノ適用ヲ受ケマスルガ、
同令ト或ル範圍ニ於テ同性質ノ事案ヲ對象
トシテ居リマズル臨時資金調整法違反ノ場
合モ、是ト權衡ヲ失セザルヤウ同法ノ罰則
ヲ強化スルノ必要ガアリマス、又戰時金融
金庫ノ設立ニ伴ヒマシテ、之ヲ臨時資金調
整法ノ規定ノ適用ヲ受クル金融機關トシテ
取扱フ必要ガアリマスルノデ、以上ノ諸點
ニ付キ必要ナル改正ヲ施サンガ爲ニ本案ヲ
提出致シタ次第デアリマス

以上三件ノ法律案ニ付キマシテハ、何卒
御審議ノ上速カニ協賛ヲ與ヘラレンコトヲ
希望致シマス(拍手)

○議長(田子一民君) 各案ノ審査ヲ付託ス
ベキ委員ノ選舉ニ付テ御諸リ致シマス

○依光好秋君 日程第十七乃至第十九ノ三
案ヲ一括シテ議長指名四十五名ノ委員ニ付
託セラレンコトヲ望ミマス

○議長(田子一民君) 依光君ノ動議ニ御異
議アリマセヌカ
〔異議ナシト呼ブ者アリ〕

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマ
ス、仍テ動議ノ如ク決シマシタ――次ニ日
程第二十乃至第三十七ハ便宜上一括議題ト
ナスニ御異議アリマセヌカ
〔異議ナシト呼ブ者アリ〕

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマ
ス、仍テ日程第二十、所得稅法中改正法律案

案、日程第二十一、法人稅法中改正法律案
案、日程第二十二、所得稅法人稅内外地關涉法

案、日程第二十三、相續稅法中改
正法律案、日程第二十四、織物消費稅法中

改正法律案、日程第二十五、物品稅法中改
正法律案、日程第二十六、電氣瓦斯稅法案、
日程第二十七、廣告稅法案、日程第二十

八、馬券稅法案、日程第二十九、印紙稅法
案、日程第三十、臨時利得稅法

中改正法律案、日程第三十一、特別法人稅
法中改正法律案、日程第三十二、營業稅法中

改正法律案、日程第三十三、臨時租稅措置
案、日程第三十四、國庫出納

金端數計算法中改正法律案、日程第三十五、
戰時災害國稅減免法案、日程第三十六、所
得稅等ノ日滿二重課稅防
止ニ關スル法律

第三十四 國庫出納金端數計算法中改
正法律案(政府提出) 第一讀會

第三十五 戰時災害國稅減免法案(政
府提出) 第一讀會

第三十六 所得稅等ノ日滿二重課稅防
止ニ關スル法律案(政府提出) 第一讀會

第三十七 地方分與稅法中改正法律案
(政府提出) 第一讀會

馬券稅法案、右十八案ヲ括シテ第一讀會ヲ開キ
マス――賀屋大藏大臣

第二十八 馬券稅法案(政府提出) 第一讀會

第二十九 印紙稅法中改正法律案(政
府提出) 第一讀會

第三十 臨時利得稅法中改正法律案
(政府提出) 第一讀會

第三十一 特別法人稅法中改正法律案
(政府提出) 第一讀會

第三十二 營業稅法中改正法律案(政
府提出) 第一讀會

第三十三 臨時租稅措置法中改正法律
案(政府提出) 第一讀會

第三十四 國庫出納金端數計算法中改
正法律案(政府提出) 第一讀會

第三十五 戰時災害國稅減免法案(政
府提出) 第一讀會

第三十六 所得稅等ノ日滿二重課稅防
止ニ關スル法律案(政府提出) 第一讀會

第三十七 地方分與稅法中改正法律案
(政府提出) 第一讀會

差金ノ授受ニ依リ決済ヲ爲シタルモノ
ト看做ス

第十一條第一項第五號中「三千圓」ヲ「五
千圓」ニ改ム

第十二條第一項第八號及第九號中「一萬
圓」ヲ「五千圓」ニ改メ同項ニ左ノ一號ヲ
加フ

十 清算取引所得ハ前年中ノ總收入金
額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額
同條第二項中「及第七號」ヲ「第七號及第
十號」ニ改メ同條ニ左ノ二項ヲ加フ

第十條第一項ノ規定ニ依ル清算取引所
得ニ付テハ賣買約定金額ト受渡ノ時ニ
於ケル當該株式ノ價格トノ差額ヲ以テ
收入金額ト看做シ其ノ所得ヲ計算ス

第一項、第二項及前項ニ規定スルモノ
ノ外清算取引所得ノ計算ニ關シ必要ナ
ル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條中「二百五十圓」ヲ「百五十圓」ニ
改ム

第十六條中「七百二十圓」ヲ「六百圓」ニ改
ム

第十七條及第十八條中「五百圓」ヲ「四百
圓」ニ、「七百二十圓」ヲ「六百圓」ニ、
「七・二分ノ五」ヲ「三分ノ二」ニ改ム

第十九條及第二十條中「五百圓」ヲ「四百
圓」ニ改ム

第二十條ノ二 清算取引所得ニ付テハ其
ノ所得ヨリ三千圓ヲ控除ス

第二十一條 分類所得稅ハ左ノ稅率ニ依
リ之ヲ賦課ス

第一讀會

第二十五 物品稅法中改正法律案(政
府提出) 第一讀會

第二十四 織物消費稅法中改正法律案
(政府提出) 第一讀會

第二十三 相續稅法中改正法律案(政
府提出) 第一讀會

第二十二 所得稅法人稅內外地關涉法
(政府提出) 第一讀會

第二十條ノ二 清算取引所得ニ付テハ其
ノ所得ヨリ三千圓ヲ控除ス

第二十一條 分類所得稅ハ左ノ稅率ニ依
リ之ヲ賦課ス

第一讀會

甲種
一 國債ノ利子
二 國債以外ノ公債ノ利子
三 其ノ他

百分ノ九
百分ノ十四
百分ノ十五

百分ノ十五
百分ノ十五

第二十七 廣告稅法案(政府提出) 第一讀會

第一讀會

乙種
一 國債ノ利子
二 國債以外ノ公債ノ利子
三 其ノ他

第三 事業所得

甲種

乙種

第四 勤勞所得

所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各税率ヲ適用ス

千六百圓以下ノ金額

千六百圓以下ノ各級ニ區分シ遞次ニ各税率ヲ適用ス

所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各税率ヲ適用ス

第六 退職所得

所得金額ヲ支拂者ノ異ナル毎ニ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各税率ヲ適用ス

二萬圓以下ノ金額

二萬圓ヲ超ユル金額

十萬圓ヲ超ユル金額

五十萬圓ヲ超ユル金額

第七 清算取引所得

所得金額ヲ支拂者ノ異ナル毎ニ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各税率ヲ適用ス

十萬圓以下ノ金額

三十萬圓ヲ超ユル金額

第八 派遣費等

所得金額ヲ支拂者ノ異ナル毎ニ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各税率ヲ適用ス

百分ノ十三

百分ノ十二

百分ノ十一

百分ノ十

百分ノ九

百分ノ八

百分ノ七

百分ノ六

百分ノ五

百分ノ四

百分ノ三

百分ノ二

百分ノ一

百分ノ零

第九 山林所得

所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各税率ヲ適用ス

三千圓ヲ超ユル金額

五千圓ヲ超ユル金額

八千圓ヲ超ユル金額

一萬二千圓ヲ超ユル金額

三萬圓ヲ超ユル金額

五萬圓ヲ超ユル金額

八萬圓ヲ超ユル金額

十二萬圓ヲ超ユル金額

二十萬圓ヲ超ユル金額

三十萬圓ヲ超ユル金額

五十萬圓ヲ超ユル金額

第十 其他所得

三項及第四項ヲ削ル

綜合所得稅ハ總所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各税率ヲ適用シテ之ヲ賦課ス但シ第八條ニ規定スル利益ノ配當及山林ノ所得ハ各他ノ所得ト之ヲ區分シ其ノ所得ヲ五分シタル金額中六百圓

三千圓ヲ超ユル金額ヲ適用シタル金額ヲ五倍税率ヲ適用シテ算出シタル金額ヲ五倍シタルモノヲ以テ各其ノ稅額トス

百分ノ十三

百分ノ十二

百分ノ十一

百分ノ十

百分ノ九

百分ノ八

百分ノ七

百分ノ六

百分ノ五

百分ノ四

百分ノ三

百分ノ二

百分ノ一

百分の零

百分ノ三十六

百分ノ三十四

百分ノ三十二

百分ノ三十

百分ノ二十九

百分ノ二十八

百分ノ二十七

百分ノ二十六

百分ノ二十五

百分ノ二十四

百分ノ二十三

百分の二十二

百分の二十一

百分の二十

百分の十九

百分の十八

百分の十七

百分の十六

百分の十五

百分の十四

百分の十三

百分の十二

百分の十一

百分の十

百分の九

百分の八

百分の七

百分の六

百分の五

百分の四

百分の三

百分の二

百分の一

百分の零

改ム

削除

第百五條

第二項

第三項

第四項

第五項

第六項

第七項

第八項

第九項

第十項

第十一項

第十二項

第十三項

第十四項

第十五項

第十六項

第十七項

第十八項

第十九項

第二十項

第二十一項

第二十二項

第二十三項

第二十四項

第二十五項

第二十六項

第二十七項

本法ハ昭和十七年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第四十三條ノ二及第六十六條ノ改正規定ハ昭和十七年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

不動產所得、乙種ノ配當利子所得、事業所得、乙種ノ勤勞所得、山林ノ所得及乙種ノ退職所得ニ付テハ昭和十七年分分類所得税ヨリ、清算取引所得ニ付テハ昭和十八年分分類所得稅ヨリ、個人ノ總所得ニ付テハ昭和十七年分綜合所得稅ヨリ本法ヲ適用ス

第十二條第一項、第十九號、第十四條、第十七條乃至第二十條又ハ第三十二條ノ改正規定ニ依リ新ニ納稅義務ヲ有スルニ至リタ

ヲ超エ千圓以下ノ金額ニ對シテハ百分ノ三ノ稅率ヲ、千圓ヲ超エ三千圓以下ノ金額ニ對シテハ百分ノ六ノ稅率ヲ、三千圓ヲ超ユル金額ニ對シテハ本項ノ稅率ヲ適用シテ算出シタル金額ヲ五倍シタルモノヲ以テ各其ノ稅額トス

三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ六十五
四萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ九十五
五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百二十
七萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百四十五
十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百八十五
十五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二百五十五
二十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二百五十
三十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二百八十五
四十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三百二十
五十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三百六十
七十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三百四百
一百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三百四百四十
二百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三百九十九
三百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ五百四十
五百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ五百九十九

第二十八條中「五年又ハ七年以内」ヲ「七年以内」ニ改ム	附 則
本法ハ昭和十七年四月一日ヨリ之ヲ施行 年又ハ十年以内ニ改ム	本法施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍 本法施行後開始シタル相續ニ關シテハ仍 從前ノ例ニ依ル但シ第八條ノ改正規定ハ 隠居ニ因リ開始シタル家督相續ニ在リテ ハ昭和十七年一月一日以後ニ開始シタル モノ、第二十三條第一項ニ規定スル贈與 ニ在リテハ同日以後ニ爲シタルモノニ付 之ヲ適用ス

織物消費稅法中改正法律案	附 則
物品稅法中左ノ通改正ス	本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
第二條中「五錢」ヲ「十錢」ニ改ム	

此等ニ類スル營業ニシテ命令ヲ以テ 定ムルモノノ用ニ使用スルモノ	第三條
劇場、映畫館、演藝場、觀物場(相 撲、野球、拳闘其ノ競技ニシテ 公衆ノ觀覽ニ供スルコトヲ目的トス ルモノヲ開催スル場所ヲ含ム)其ノ 他一定ノ催物又ハ設備ヲ爲シ公衆ノ 觀覽又ハ遊戯ニ供スル場所ニシテ命 令ヲ以テ定ムルモノノ用ニ使用スル モノ	四
撞球場、麻雀場其ノ他命令ヲ以テ 定ムル遊技場ノ用ニ使用スルモノ	五
俱樂部、會館其ノ他名稱ノ何タル ヲ問ハズ會員其ノ他命令ヲ以テ定ム ル者ノ親睦ヲ圖リ又ハ其ノ慰安若ハ 娛樂ノ用ニ供スル場所ノ用ニ使用ス ルモノ	六
前各號ノ外照明ノ用又ハ命令ヲ以 テ定ムル機械、器具若ハ裝置ノ用ニ 使用スルモノ	七

第一條 左ニ掲グ電氣又ハ瓦斯ニハ電 氣事業者ニ非ザル者ガ自ラ發電スル 電氣ヲ電氣事業者ニ非ザル者ニ使用セ シムルトキハ其ノ電氣ハ之ヲ其ノ電氣 事業者ニ非ザル者ガ使用スル用途ニ當 該發電者が使用スルモノト看做ス	第三條 組合又ハ其同事業ニ依リ組合員 又ハ其同事業者ニ對シ電氣ヲ供給スル 事業又ハ瓦斯ヲ導管ニ依リ供給スル事 業ハ本法ノ適用ニ付テハ之ヲ電氣事業 又ハ瓦斯事業ト看做ス但シ組合員又ハ 共同事業者ヨリ料金ヲ領收セザルモノ ハ此ノ限ニ在ラズ
第一條 左ニ掲グ電氣又ハ瓦斯ニハ電 氣瓦斯稅ヲ課セズ	第四條 左ニ掲グル者ニハ電氣瓦斯稅ヲ 課セズ
第一 計共同住宅又ハ賃事務所ノ經營者 其ノ他家屋全部又ハ一部ヲ他人ニ貸付 スル者ガ電氣事業者又ハ瓦斯事業者ヨ リ供給ヲ受クル電氣又ハ瓦斯ヲ家屋ノ 借主ニ使用セシムルトキハ其ノ電氣又 ハ瓦斯ハ之ヲ其ノ借主ガ使用スル用途 ニ當該貸主ガ使用スルモノト看做ス	第五條 左ニ掲グ電氣又ハ瓦斯ニハ電 氣瓦斯稅ヲ課セズ
第一 電氣事業者ガ料金ヲ領收セズシテ他人 ニ電氣ヲ使用セシムルトキ又ハ瓦斯事 業者ガ料金ヲ領收セズシテ他人ニ瓦斯 ヲ使用セシムルトキハ其ノ電氣又ハ瓦 斯ハ之ヲ其ノ他人ガ使用スル用途ニ當 該電氣事業者又ハ瓦斯事業者ガ使用ス ルモノト看做ス	第六條 電氣瓦斯稅ハ左ノ區別ニ依リ之 ヲ課ス
第一 電氣事業者ガ電氣又ハ瓦斯ヲ使用スル 場合ノ百分ノ十	第一 電氣事業者ガ瓦斯ヲ使用スル場合 ノ百分ノ十
第一 電氣事業者ガ電氣又ハ瓦斯ヲ使用スル 場合ノ百分ノ十	第一 電氣事業者ガ瓦斯ヲ使用スル場合 ノ百分ノ十
第一 電氣事業者ガ電氣又ハ瓦斯ヲ使用スル 場合ノ百分ノ十	第一 電氣事業者ガ瓦斯ヲ使用スル場合 ノ百分ノ十

前項ノ料金又ハ出力ノ算定ニ關シテハ
命令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 本法ニ於テ料金トハ電氣料、瓦
斯料、基本料其ノ他名義ノ何タルヲ問
ハズ電氣又ハ瓦斯ノ使用ニ付電氣事業
者又ハ瓦斯事業者ニ支拂フベキ金額ヲ
謂フ

第八條 左ノ各號ノニニ該當スル場合ハ
電氣瓦斯稅ヲ課セズ
一 同一ノ需用場所ニ於テ使用スル電氣
ノ料金ガ一月三圓ニ満タザルトキ
二 同一ノ需用場所ニ於ケル定額制ニ
依ル電燈又ハラヂオ取付數が四個
以下ニシテ其ノ總燭光數又ハ其ノ總
容量ガ命令ヲ以テ定ムル燭光數又ハ
容量以下ナルトキ但シ定額制ニ依ル
電燈料又ハラヂオ以外ノ用途ニ電氣
ヲ使用スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ
三 同一ノ場所ニ於テ使用スル發電機
ノ出力ガ十分ノ三キロワットニ満タ
ザルトキ

四 同一ノ需用場所ニ於テ使用スル瓦
斯ノ料金ガ一月三圓ニ満タザルトキ
五 同一ノ需用場所ニ於ケル瓦斯器具
取付用ノカラシ又ハコックノ孔口徑ガ各八分
ノ三時以下ナル場合ニ於テ瓦斯ヲ專
ラ住宅ノ炊事用ニ使用スルトキ但シ
命令ヲ以テ定ムル器具ニ依リ瓦斯ヲ
使用スル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第六條 第一項第二號ニ該當スル場合ノ
電氣瓦斯稅ハ電氣事業者又ハ瓦斯事業
者毎月使用シタル電氣又ハ瓦斯ニ對ス
ル分ヲ翌月末日迄ニ政府ニ納ムベシ
第七條 第一項第三號ニ該當スル場合ノ
電氣瓦斯稅ハ其ノ年分ヲ電氣事業者ニ
非ザル者ニシテ自ラ發電スル電氣ヲ使
用スルモノ毎年二月末日迄ニ政府ニ納
ムベシ

第八條 電氣事業者又ハ瓦斯事業者
金ヲ領收セザル爲命令ヲ以テ定ムル期
間内ニ電氣瓦斯稅ヲ徵收セザルトキハ
命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ政府ニ申告
スペシ
第九條 本法ノ適用ニ付テハ被相續人
ノ使用シタル電氣又ハ瓦斯ハ之ヲ相續
人ノ使用シタルモノト看做シ合併ニ因
リテ消滅シタル法人ノ使用シタル電氣
又ハ瓦斯ハ之ヲ合併後存續スル法人又
ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ノ使用
シタルモノト看做ス

第十條 電氣事業又ハ瓦斯事業ノ許可
ヲ受ケタル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ
其ノ旨ヲ政府ニ申告スベシ
第十一條 前條ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法
ノ規定ニ依ル罰金又ハ監禁又ハ徒刑
ヲ爲シ又ハ其ノ職務ノ執行ヲ拒ミ
妨げ若ハ忌避シタル者

第十二條 本法ノ適用ニ付テハ被相續人
ノ使用シタル電氣又ハ瓦斯ハ之ヲ相續
人ノ使用シタルモノト看做シ合併ニ因
リテ消滅シタル法人ノ使用シタル電氣
又ハ瓦斯ハ之ヲ合併後存續スル法人又
ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ノ使用
シタルモノト看做ス

第十三條 電氣事業又ハ瓦斯事業ノ許可
ヲ受ケタル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ
其ノ旨ヲ政府ニ申告スベシ
第十四條 電氣事業者又ハ瓦斯事業者ハ
月十日迄ニ政府ニ提出スベシ
電氣事業者ニ非ザル者ニシテ自ラ發電

スル電氣ヲ使用スルモノハ命令ノ定ム
ル所ニ依リ其ノ發電機ノ出力ヲ記載シ
タル申告書ヲ毎年一月末日迄ニ政府ニ
提出スベシ

申告書ノ提出ナキトキ又ハ政府ニ於テ
其ノ課稅標準ヲ決定ス
申告書ノ提出ナキトキ又ハ政府ニ於テ
其ノ課稅標準ヲ決定ス

申告書ノ提出ナキトキ又ハ政府ニ於テ
其ノ課稅標準ヲ決定ス
申告書ノ提出ナキトキ又ハ政府ニ於テ
其ノ課稅標準ヲ決定ス

命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ業務ニ關ス
ル事項ヲ帳簿ニ記載スベシ
電氣事業者又ハ瓦斯事業者ハ命令ノ定
ムル所ニ依リ其ノ業務ニ關スル事項ヲ
政府ニ申告スベシ

命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ業務ニ關ス
ル事項ヲ帳簿ニ記載スベシ
電氣事業者又ハ瓦斯事業者ハ命令ノ定
ムル所ニ依リ其ノ業務ニ關スル事項ヲ
政府ニ申告スベシ

二項、第四十條、第四十一條、第四十八
條第二項、第六十三條及第六十六條ノ
規定ヲ適用セズ
附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム但
シ第六條第二項ノ規定ハ公布ノ日ヨリ之
ヲ施行ス

第六條第一項第一號又ハ第二號ニ該當ス
ル場合ノ電氣瓦斯稅ハ本法施行後使用ス
ル電氣又ハ瓦斯ニ對スル分ヨリ之ヲ徵收
ス

第十五條 第十條第一項ノ規定ニ依リ徵
收スベキ電氣瓦斯稅ヲ徵收セザルトキ
又ハ其ノ徵收シタル稅金ヲ納付セザル
トキハ國稅徵收ノ例ニ依リ之ヲ其ノ徵收
義務者ヨリ徵收ス

第十六條 徵稅官吏ハ調查上必要アルト
キハ電氣事業者又ハ瓦斯事業者ニ對シ
質問ヲ爲シ又ハ其ノ業務ニ關スル帳簿
書類ヲ検査スルコトヲ得
徵稅官吏ハ調查上必要アルトキハ納稅
義務者又ハ納稅義務アリト認ムル者ニ
對シ質問ヲ爲シ又ハ電氣事業者ニ非ザ
ル者ニシテ自ラ發電スル電氣ヲ使用ス
ルモノノ發電機ヲ檢查スルコトヲ得
ス

昭和十七年ニ限リ第六條第一項第三號中
十二圓トアルハ九圓、第九條第二項中每
年一月末日迄トアルハ本法施行後一月以
内、第十條第三項中毎年一月末日迄トア
ルハ五月末日迄トス
本法施行前ヨリ引續キ電氣事業又ハ瓦斯
事業ヲ營ム者ハ本法施行後一月以内ニ其
ノ旨ヲ政府ニ申告スベシ

第十七條 左ノ各號ノニニ該當スル者ハ
百圓以下ノ罰金又ハ料金ニ處ス

第一項第一條第一項又ハ第十四條第二
項ノ規定ニ依ル申告ヲ怠リ又ハ帳簿ヲ隱
匿シタル者

第二項第一條第一項又ハ第十四條第二
項ノ規定ニ依ル申告ヲ怠リ又ハ詐り
ノ記載ヲ怠リ若ハ詐り又ハ帳簿ヲ隱
匿シタル者

第三項第一條第一項又ハ第十四條第二
項ノ規定ニ依ル申告ヲ怠リ又ハ詐り
ノ記載ヲ怠リ若ハ詐り又ハ帳簿ヲ隱
匿シタル者

第一條 左ニ掲グル廣告ニハ本法ニ依リ
廣告稅ヲ課ス

第一種

一 新聞紙、雑誌、書籍其ノ他ノ出
版物ニ依ル廣告但シ第二號、第三
號又ハ第二種第一號乃至第三號ニ
該當スルモノヲ除ク

二 汽車、電車、自動車、汽船其ノ
他ノ交通運輸機關又ハ交通運輸業
ノ設備ニ依ル廣告但シ第二種第三
號ニ該當スルモノヲ除ク

三 映畫、入場券、乗車船券、氣球其
ノ他命令ヲ以テ定ムモノニ依ル
廣告

第二種

一 立看板、掛看板、幟、旗又ハ此
等ニ類スルモノニ依ル廣告但シ第
一種第二號ニ該當スルモノヲ除ク

一 ポスター依ル廣告但シ第一種	又ハ此等ニ類スルモノ其ノ他命令ヲ以テ定ムルモノニ依ル廣告但シ
第二種ニ該當スルモノヲ除ク	第一種第二號ニ該當スルモノヲ除ク
三 チラシ其ノ他命令ヲ以テ定ムルモノニ依ル廣告	申告ヲ不相當ト認メタルトキハ政府ハ其ノ課稅標準額ヲ決定ス
四 建植看板、野立看板、額面廣告	第一條 广告稅ノ稅率左ノ如シ 對スル廣告稅ハ毎月分ヲ翌月末日迄二納付スベシ
第一種ノ廣告	第一種及第二種第三號ノ廣告ニ
第二種ノ廣告	對スル廣告稅ハ毎月分ヲ翌月末日迄二納付スベシ
第三種ノ廣告	申告書ノ提出ナキトキ又ハ政府ニ於テ申告ヲ不相當ト認メタルトキハ政府ハ其ノ課稅標準額ヲ決定ス
チラシ	申告主ガ前條第二項ノ規定ニ依リ申告ヲ爲ス際其ノ年分ヲ同條第三項ノ規定ニ依リ申告ヲ爲ス際翌年分ヲ納付ス
第一號ノ廣告	申告主が前條第二項ノ規定ニ依リ申告ヲ爲ス際翌年分ヲ納付ス

廣告ノ料金ノ百分ノ十	又ハ此等ニ類スルモノ其ノ他命令ヲ以テ定ムルモノニ依ル廣告但シ
一個ニ付	第一種第二號ニ該當スルモノヲ除ク
一個ニ付	申告書ノ提出ナキトキ又ハ政府ニ於テ申告ヲ不相當ト認メタルトキハ政府ハ其ノ課稅標準額ヲ決定ス
一千個又ハ其ノ端數ニ付	第一條 广告稅ノ稅率左ノ如シ 對スル廣告稅ハ毎月分ヲ翌月末日迄二納付スベシ
千個又ハ其ノ端數ニ付	申告主ガ前條第二項ノ規定ニ依リ申告ヲ爲ス際其ノ年分ヲ同條第三項ノ規定ニ依リ申告ヲ爲ス際翌年分ヲ納付ス
二十錢	申告主が前條第二項ノ規定ニ依リ申告ヲ爲ス際翌年分ヲ納付ス
五十錢	申告主ガ前條第二項ノ規定ニ依リ申告ヲ爲ス際翌年分ヲ納付ス
二十錢	申告主ガ前條第二項ノ規定ニ依リ申告ヲ爲ス際翌年分ヲ納付ス
五十錢	申告主ガ前條第二項ノ規定ニ依リ申告ヲ爲ス際翌年分ヲ納付ス
二十圓	申告主ガ前條第二項ノ規定ニ依リ申告ヲ爲ス際翌年分ヲ納付ス

第五條 第一種ノ廣告ニ對スル廣告稅ハ	第一種若ハ第二種ノ廣告ヲ爲ス業ヲ營マントスル者ヨリ、第二種第三號ノ廣告ニ對スル廣告稅ハ廣告主ニ對スル廣告稅ニ印紙ヲ貼用シテ之ヲ納ムベシ但シ廣告稅額ニ相當スル現金ヲ政府ニ納付シテ納稅濟證印ノ押捺ヲ受ケ印紙貼用ニ代フルコトヲ得
第六條 第一種ノ廣告ヲ爲ス者ハ毎月其ノ爲シタル廣告ニ付其ノ種類毎ニ廣告ヲ爲ス場合ニ於ケル廣告ノ料金ハ其ノ廣告ノ對價ドシテ取得スベキ金額ヲ謂フ自己ノ爲ニ廣告ヲ爲ス場合又ハ他人ノ爲料若ハ特ニ低額ノ料金ヲ以テ廣告ヲ爲ス場合ニ於ケル廣告ノ料金ハ其ノ廣告ノ對價ドシテ取得スベキ金額ヲ謂フ額ニ依ル	第一種若ハ第二種ノ廣告ヲ爲ス業ヲ營マントスル者第一種若ハ第二種ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營マントスル者又ハ第二種第三號ニ掲グルモノノ作製ヲ爲ス業ヲ營マントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ營業所毎ニ政府ニ由告スベシ其ノ營業ヲ廢止セントスルトキ亦同ジ
第七條 左ニ掲タル廣告ニハ廣告稅ヲ課セズ	第一種若ハ第二種ノ廣告ヲ爲ス業ヲ營マントスル者第一種若ハ第二種ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營マントスル者又ハ第二種第三號ニ掲グルモノノ作製ヲ爲ス業ヲ營マントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ營業所毎ニ政府ニ由告スベシ其ノ營業ヲ廢止セントスルトキ亦同ジ
一 國、北海道、府縣、市町村其ノ他	第一種若ハ第二種ノ廣告ヲ爲ス業ヲ營マントスル者第一種若ハ第二種ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營マントスル者又ハ第二種第三號ニ掲グルモノノ作製ヲ爲ス業ヲ營マントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ營業所毎ニ政府ニ由告スベシ其ノ營業ヲ廢止セントスルトキ亦同ジ
第二條 左ニ掲タル廣告ニハ廣告稅ヲ課セズ	第一種若ハ第二種ノ廣告ヲ爲ス業ヲ營マントスル者第一種若ハ第二種ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營マントスル者又ハ第二種第三號ニ掲グルモノノ作製ヲ爲ス業ヲ營マントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ營業所毎ニ政府ニ由告スベシ其ノ營業ヲ廢止セントスルトキ亦同ジ
三 法令ニ依ルモノ	第一種若ハ第二種ノ廣告ヲ爲ス業ヲ營マントスル者第一種若ハ第二種ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營マントスル者又ハ第二種第三號ニ掲グルモノノ作製ヲ爲ス業ヲ營マントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ營業ニ關スル事項ヲ帳簿ニ記載シ又ハ必要ナル事項ヲ政府ニ申告スベシ
四 公ノ選舉ニ關スルモノ	第一種若ハ第二種ノ廣告ヲ爲ス業ヲ營マントスル者第一種若ハ第二種ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營マントスル者又ハ第二種第三號ニ掲グルモノノ作製ヲ爲ス業ヲ營マントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ營業ニ關スル事項ヲ帳簿ニ記載シ又ハ必要ナル事項ヲ政府ニ申告スベシ

第一種ノ廣告	ノ廣告ヲ爲ス業ヲ營ム者、第一種若ハ第二種ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營ム者、第二種第三號ニ掲グルモノノ作製ヲ爲ス業ヲ營ム者又ハ第二種第四號ニ掲タルモノノ作製ヲ爲ス業ヲ營ム者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ營業ニ關スル事項ヲ帳簿ニ記載シ又ハ必要ナル事項ヲ政府ニ申告スベシ
第二種ノ廣告	ノ廣告ヲ爲ス業ヲ營ム者、第一種若ハ第二種ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營ム者又ハ第二種第三號ニ掲グルモノノ作製ヲ爲ス業ヲ營ム者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ營業ニ關スル事項ヲ帳簿ニ記載シ又ハ必要ナル事項ヲ政府ニ申告スベシ
第三種ノ廣告	ノ廣告ヲ爲ス業ヲ營ム者、第一種若ハ第二種ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營ム者又ハ第二種第三號ニ掲グルモノノ作製ヲ爲ス業ヲ營ム者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ營業ニ關スル事項ヲ帳簿ニ記載シ又ハ必要ナル事項ヲ政府ニ申告スベシ
四 公ノ選舉ニ關スルモノ	ノ廣告ヲ爲ス業ヲ營ム者、第一種若ハ第二種ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營ム者又ハ第二種第三號ニ掲グルモノノ作製ヲ爲ス業ヲ營ム者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ營業ニ關スル事項ヲ帳簿ニ記載シ又ハ必要ナル事項ヲ政府ニ申告スベシ

前項第二號ニ規定スル者ニ付テハ直ニ
其ノ廣告稅ヲ徵收ス

第十六條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ
百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

一 第十條第一項ノ規定ニ依ル帳簿ノ
記載ヲ怠リ若ハ詐り又ハ帳簿ヲ隠匿
シタル者

二 第十條ノ規定ニ依ル申告ヲ怠リ又
ハ詐りタル者

三 第十一條ノ規定ニ依ル收稅官吏ノ
質問ニ對シ答辯ヲ爲サズ又ハ虛偽ノ
陳述ヲ爲シ又ハ其ノ職務ノ執行ヲ拒
ミ、妨げ若ハ忌避シタル者

第十七條 第十二條ノ規定ニ違反シ廣告
ニ貼用シタル印紙ヲ消サザル者ハ廣告
一個毎ニ四圓ノ科料ニ處ス

第十八條 第十四條又ハ前條ノ罪ヲ犯シ
タル者ニハ刑法第三十八條第一項ノ規
定ヲ適用セズ第十三條、第十四條又ハ
前條ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十
八條第三項但書、第三十九條第二項、
第四十條、第四十一條、第四十八條第
二項、第六十三條及第六十六條ノ規定
ヲ適用セズ

第十九條 第一種若ハ第二種ノ廣告ヲ付
納稅ノ義務アル者、第二種ノ廣告ヲ爲
ス業ヲ營ム者、又ハ第一種若ハ第二種
ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營ム者ノ代
理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ
他ノ從業者ガ其ノ業務ニ關シ本法ヲ犯
シタルトキハ其ノ第一種若ハ第二種ノ
廣告ヲ爲ス業ヲ營ム者又ハ第一種若ハ
第二種ノ廣告ニ付取次ヲ爲ス業ヲ營ム
者ヲ處罰ス

附 則

本法施行前ヨリ引續キ爲ス第二種第一號
又ハ第二號ノ廣告ニ付テハ本法施行ノ日
ヨリ十日以内ニ廣告ニ相當印紙ヲ貼用ス
ベシ

本法施行前ヨリ引續キ爲ス第二種第四號
ノ廣告主ハ命令ノ定ムル所ニ依リ
本法施行後二月以内ニ其ノ旨ヲ政府ニ申
告シ昭和十七年分ノ廣告稅ヲ納付スペシ
前項ノ場合ニ於テ第二種第四號ノ廣告ニ
對スル廣告稅ハ第二條ニ規定スル稅額ノ
四分ノ三トス

馬券稅法案

馬券稅法

第一條 競馬法ニ依ル競馬又ハ軍馬資源
保護法ニ依ル鍛錬馬競走ヲ開催スル者
ニハ本法ニ依リ馬券稅ヲ課ス

第二條 馬券稅ハ競馬法ニ依ル勝馬投票
券又ハ軍馬資源保護法ニ依ル優等馬票
ノ發行ニ依リ得タル金額及其ノ勝馬投
票又ハ優等馬票ノ購買者ニ拂戾スペ
キ金額ヨリ命令ヲ以テ定ムル金額ヲ控
除シタル金額ニ付之ヲ課ス

第三條 馬券稅ノ稅率左ノ如シ

一 膜馬投票券ノ發行ニ依リ得タル金 額ノ百分ノ七	同五百圓以下ノモノ
二 優等馬票ノ發行ニ依リ得タル金額ノ 百分ノ四	同一千圓以下ノモノ

一 膜馬投票券ノ購買者ニ拂戾スペキ
金額ヨリ命令ヲ以テ定ムル金額ヲ控
除シタル金額ノ百分ノ二十

優等馬票ノ購買者ニ拂戾スペキ金額
ノ百分ノ四十

ヨリ命令ヲ以テ定ムル金額ヲ控除シ
タル金額ノ百分ノ十

罰金又ハ科料ニ處ス

第四條 競馬法ニ依ル競馬又ハ軍馬資源
保護法ニ依ル鍛錬馬競走ヲ開催スル者
ニハ競馬又ハ鍛錬馬競走終了後直ニ第二
條ノ金額ヲ記載シタル申告書ヲ政府ニ
提出スペシ

申告書ノ提出ナキトキ又ハ政府ニ於テ
申告ヲ不相當ト認メタルトキハ政府ハ
其ノ課稅標準額ヲ決定ス

第五條 馬券稅ハ競馬又ハ鍛錬馬競走終
了後二十日以内ニ納付スペシ

第六條 競馬法ニ依ル競馬又ハ軍馬資源
保護法ニ依ル鍛錬馬競走ヲ開催スル者
ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ業務ニ關
スル事項ヲ帳簿ニ記載シ又ハ必要ナル
事項ヲ政府ニ申告スペシ

第七條 収稅官吏ハ競馬法ニ依ル競馬又
ハ軍馬資源保護法ニ依ル鍛錬馬競走ヲ
開催スル者ニ對シ業務ニ關シ質問ヲ爲
シ又ハ帳簿書類ヲ検査スルコトヲ得

第八條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ依リ馬
券稅ヲ浦脱シ又ハ浦脱セントシタル者
ハ其ノ浦脱シ又ハ浦脱セントシタル稅
金ノ五倍ニ相當スル罰金ニ處シ直ニ其
ノ稅金ヲ徵收ス但シ罰金額ガ二十圓ニ
満タザルトキハ之ヲ二十圓トス

第九條 第四條第一項ノ規定ニ依ル申告
本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
明治四十年法律第二十一號第一條第一項
ニ左ノ二號ヲ加フ

二十一 馬券稅

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
明治四十年法律第二十一號第一條第一項
ニ左ノ二號ヲ加フ

二十二 廣告稅

印紙稅法中改正法律案

印紙稅法中左ノ通改正ス

第四條第一項第一號乃至第五號ヲ左ノ如
ク改ム

印紙稅法中改正法律案

印紙稅法中改正法律案

印紙稅法中改正法律案

印紙稅法中改正法律案

印紙稅法中改正法律案

印紙稅法中改正法律案

印紙稅法中改正法律案

印紙稅法中改正法律案

印紙稅法中改正法律案

ヲ怠リ又ハ詐りタル者ハ三百圓以下ノ
罰金又ハ科料ニ處ス

第十條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ百
圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

一 第六條ノ規定ニ依ル帳簿ノ記載ヲ
怠リ若ハ詐り又ハ帳簿ヲ隠匿シタル
者

二 第六條ノ規定ニ依ル申告ヲ怠リ又
ハ詐りタル者

三 第七條ノ規定ニ依ル收稅官吏ノ質
問ニ對シ答辯ヲ爲サズ若ハ虛偽ノ陳
述ヲ爲シ又ハ其ノ職務ヲ執行ヲ拒
ミ、妨げ若ハ忌避シタル者

四 第八條ノ規定ニ依ル收稅官吏ノ質
問ニ對シ答辯ヲ爲サズ若ハ虛偽ノ陳
述ヲ爲シ又ハ其ノ職務ヲ執行ヲ拒
ミ、妨げ若ハ忌避シタル者

五 第九條 第四條第一項ノ規定ニ依ル申告
本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
明治四十年法律第二十一號第一條第一項
ニ左ノ二號ヲ加フ

二十一 馬券稅

印紙稅法中改正法律案

本法施行前ヨリ引續キ第一種若ハ第二種

特別法人稅法中改正法律案
特別法人稅法中左ノ通改正ス

第二條第五號ノ次ニ左ノ一號ヲ加フ

五ノ二 森林組合及森林組合聯合會

(所屬ノ組合員、組合又ハ聯合會ヲ

シテ出資ヲ爲サシメザルモノヲ除

ク)

第九條中「百分ノ六」ヲ「百分ノ十二・五」

附則

本法ハ昭和十七年四月一日ヨリ之ヲ施行

ス

本法ハ昭和十七年一月一日以後終了スル

事業年度分ヨリ之ヲ適用ス

營業稅法中改正法律案

營業稅法中左ノ通改正ス

第七條第二項ノ次ニ左ノ一項ヲ加フ

法人ノ清算期間中ニ納付シタル分類所

得稅ニシテ法人稅法第十六條ノ規定ニ

依リ其ノ額ヲ清算所得ニ對スル法人稅

額ヨリ控除スペキモノハ第一項ノ清算

純益ノ計算上之ヲ損金ニ算入セズ

第十四條中「地租額」ノ下ニ「又ハ家屋稅

額」ヲ「土地」ノ下ニ「又ハ家屋」ヲ、「地

租」ノ下ニ「又ハ家屋稅」ヲ加フ

本法ハ昭和十七年四月一日ヨリ之ヲ施行

ス

法人ノ各事業年度ノ純益ニ對スル營業稅

ニ付テハ昭和十七年一月一日以後終了ス

ル事業年度分ヨリ、清算純益ニ對スル營業

稅ニ付テハ昭和十七年一月一日以後ニ於ケ

ル解散又ハ合併ニ因ル分ヨリ、個人ノ營業

稅ニ付テハ昭和十八年分ヨリ本法ヲ適用ス

臨時租稅措置法中改正法律案
臨時租稅措置法中左ノ通改正ス

第一條中「營業稅」ノ下ニ「酒稅」ヲ加ヘ

「又ハ免除ス」ヲ「若ハ免除シ又ハ其ノ課
稅標準ノ計算ニ關スル特例ヲ設ク」ニ改
ム

「百分ノ三・六」ヲ「百分ノ七・五」ニ改ム

第一條ノ四ニ左ノ一號ヲ加フ

四 命令ヲ以テ指定スル價格平衡資金
ヘノ繰入金

第一條ノ八中「百分ノ十」ヲ「百分ノ十五」
ニ改ム

第一條ノ九 命令ヲ以テ定ムル預金、貯

金、公債若ハ社債又ハ合同運用信託ノ

利子又ハ利益ニシテ個人ノ受クルモノ又

ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ利子又

ハ利益金額ノ百分ノ一乃至百分ノ五ニ

相當スル甲種ノ配當利子所得ニ對スル

分類所得稅ヲ輕減ス

第一條ノ十 元本ノ償還及利息ノ支拂ニ

付政府ノ保證アル社債ノ利子ニ付テハ所

得稅法第二十一條ニ規定スル稅率百分

ノ十五ヲ百分ノ十四 同法第二十二條

ニ規定スル稅率百分ノ二十二ヲ百分ノ

二十一トシタル場合ノ差減額ニ相當ス

ル甲種ノ配當利子所得ニ對スル分類所

得稅ヲ輕減ス

第一條ノ十一 金融機關ニ對スル金融機

關ノ預金ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノ

ノ利子ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ

甲種ノ配當利子所得ニ對スル分類所得

稅ヲ免除ス

第一條ノ十二 賀蓄銀行法第九條第一項

ノ規定ニ依リ賀蓄銀行ノ供託シタル公

債及社債ノ利子ニ付テハ命令ノ定ムル

所ニ依リ第一條ノ十及所得稅法第二十

一條第一項ノ規定ニ拘ラズ左ノ稅率ニ

依リ分類所得稅ヲ賦課ス

一 國債ノ利子ニ付テハ百分ノ三

二 國債以外ノ公債ノ利子ニ付テハ百

分ノ十一

三 社債ノ利子ニ付テハ百分ノ十二但
シ第一條ノ十二ニ規定スル社債ノ利子
ニ付テハ百分ノ十一

第一條ノ十三 明治三十九年法律第三十
四號又ハ社債等登錄法ニ依リ銀行(日
本銀行ヲ除ク)其ノ他命令ヲ以テ定ム

ノ規定ニ拘ラズ左ノ稅率ニ依リ分類所

得稅ヲ賦課ス

一 國債ノ利子ニ付テハ百分ノ五但シ
命今ヲ以テ定ムル銀行ノ登錄シタル

國債ノ利子ニ付テハ百分ノ四

二 國債以外ノ公債ノ利子ニ付テハ百
分ノ十二

三 社債ノ利子ニ付テハ百分ノ十三但
シ第一條ノ十二ニ規定スル社債ノ利子
ニ付テハ百分ノ十二

第一條ノ十四 所得稅法施行地ニ本店又
ハ主タル事務所ヲ有スル法人ヨリ受ク
ル利益若ハ利息ノ配當又ハ剩餘金ノ分
配ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノニ付テ
ハ命令ノ定ムル所ニ依リ所得稅法第二
十一條ノ規定スル稅率百分ノ十五ヲ百
分ノ十三、同法第二十二條ニ規定スル
稅率百分ノ二十二ヲ百分ノ二十トシタ
ル場合ノ差減額ニ相當スル甲種ノ配當
利子所得ニ對スル分類所得稅ヲ輕減ス

第一條ノ十五 甲法人ガ國家總動員法其
ノ他ノ法令ニ依リ當該法令ニ基キテ設
立セラレタル乙法人ト爲リ又ハ之ニ吸
收セラレタルトキハ所得稅法、法人稅
法、營業稅法及臨時利得稅法ノ適用ニ
關シテハ甲法人ハ合併ニ因リテ消滅シ
タル法人ト看做シ乙法人ハ合併ニ因リ
テ設立シタル法人ト看做ス

第一條ノ十六 法人ノ爲シタル寄附金
(命令ヲ以テ定ムルモノヲ除ク)中命令

ノ定ムル所ニ依リ計算シタル金額ヲ超
過スル部分ノ全額ニ付テハ法人稅法ニ
依ル所得、營業稅法ニ依ル純益及臨時
利得稅法ニ依ル利益ノ計算上之ヲ損金
ニ算入セズ

政府ニ於テ必要アリト認ムルトキハ命
令ノ定ムル所ニ依リ寄附金審査委員會
ノ諮詢ヲ經テ前項ノ超過金額ニ對シテ
課セラルベキ所得ニ對スル法人稅ヲ免
除スルコトヲ得

寄附金審査委員會ニ關スル規程ハ勅令
ヲ以テ之ヲ定ム

第一條ノ十七 法令、法令ニ基ク命令又
ハ行政官廳ノ指道若ハ斡旋ニ依リ昭和
十六年十一月一日以後昭和十八年三月
三十日迄ニ事業ノ統制ノ必要上合併
又ハ解散シタル拂込資本金額百萬圓以
下ノ法人ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノ
ノ清算所得ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ
依リ改正前ノ法人稅法第十六條ニ規定
スル稅率百分ノ十八又ハ改正後ノ同條
ニ規定スル稅率百分ノ二十五ヲ百分ノ
十五トシタル場合ノ差減額ニ相當スル
法人稅ヲ輕減ス

第一條ノ十八 命令ヲ以テ定ムル法人ガ
法令、法令ニ基ク命令又ハ行政官廳ノ指
導若ハ斡旋ニ依リ昭和十七年一月一
日以後昭和十八年三月三十一日迄ニ事
業ノ統制ノ必要上合併又ハ解散シタル
拂込資本金額百萬圓ヲ超ユル法人ニシ
テ命令ヲ以テ定ムルモノノ清算所得ニ
付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ法人稅法
第十六條ニ規定スル稅率百分ノ二十五
ヲ百分ノ二十トシタル場合ノ差減額ニ
相當スル法人稅ヲ輕減ス

第一條ノ十九 命令ヲ以テ定ムル法人ガ
法令、法令ニ基ク命令又ハ行政官廳ノ指
導若ハ斡旋ニ依リ昭和十六年十一月一
日以後昭和十八年三月三十一日迄ニ其

ノ事業ニ屬スル設備又ハ權利其ノ他ヲ
事業ノ統制ノ必要上設立セラル法人
ニ出資又ハ譲渡ヲ爲シタルトキハ其ノ
出資又ハ譲渡ニ對シ與ヘラレタル有價

證券ノ價額ニ關シ出資又ハ譲渡ヲ爲シ
タル事業年度ニ於ケル法人稅法ニ依ル
所得、營業稅法ニ依ル純益及臨時利得
稅法ニ依ル利益ノ計算ニ付命令ヲ以テ

特例ヲ設クルコトヲ得
第一條ノ十九 命令ヲ以テ定ムル法人ガ
法令、法令ニ基ク命令又ハ行政官廳ノ指
導若ハ斡旋ニ依リ昭和十七年四月一
日以後昭和十八年三月三十一日迄ニ事
業ノ統制ノ必要上合併又ハ解散シタル
場合ニ於テ其ノ株主又ハ社員ノ受クル

所付稅法第八條ニ規定スル利益ノ配當
一 所得稅
總所得金額五千圓以下ナルトキ
同一萬圓以下ナルトキ
同一萬圓ヲ超エルトキ
二 營業稅
同八千圓ヲ超エルトキ
第一條ノ二十一 法令、法令ニ基ク命令
又ハ行政官廳ノ指導若ハ斡旋ニ依リ昭
和十六年一月一日以後昭和十七年十二
月三十一日迄ニ事業ノ統制ノ必要上合
併若ハ解散シタル法人又ハ營業ノ全部
若ハ大部分ヲ廢止シタル個人ノ使用人
ニシテ退職シタル者ノ當該法人又ハ個

當該所得稅額ノ全部
當該所得稅額ノ十分ノ五
當該所得稅額ノ十分ノ二
當該營業稅額ノ全部
當該營業稅額ノ十分ノ五
當該營業稅額ノ十分ノ二

人ヨリ受クル俸給、給料、賞與又ハ此
等ノ性質ヲ有スル給與ニ付テハ命令ノ
定ムル所ニ依リ昭和十七年分又ハ昭和
十八年分ノ乙種ノ勤勞所得ニ對スル分
類所得稅及綜合所得稅ニ限り左ノ區分
ニ依リ之ヲ輕減又ハ免除ス
當該所得稅額ノ十分ノ二

三 第二回以後ノ株金拂込
毎回ノ金錢ニ依ル拂込株金額ノ
千分ノ五ト金錢以外ノ財產ノ出
資ニ依ル拂込株金額ノ
一千萬圓ヲ超エルトキ
同一萬圓ヲ超エルトキ
總所得金額五千圓以下ナルトキ
第一十三條ノ二 政府ノ承認ヲ受ケアルコ
ル專賣法第二十條第二號ノ規定ニ依
リ賣渡ヲ受ケタルアルコールヲ原料ト

ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ同法第
二十一條ニ規定スル稅率百分ノ十五ヲ
百分ノ十、同法第二十二條ニ規定スル
稅率百分ノ二十二ヲ百分ノ十七トシタ
ル場合ノ差減額ニ相當スル甲種ノ配當
利子所得ニ對スル分類所得稅ヲ輕減ス
第一條ノ二十一 法令、法令ニ基ク命令又
ハ行政官廳ノ指導若ハ斡旋ニ依リ昭和
十六年一月一日以後昭和十七年十二月
三十一日迄ニ事業ノ統制ノ必要上營業
ノ全部又ハ大部分ヲ廢止シタル個人ノ
當該營業ヨリ生ズル所得又ハ純益ニ付
テハ命令ノ定ムル所ニ依リ昭和十七年
分又ハ昭和十八年分ノ所得稅及營業稅
ニ限り左ノ區分ニ依リ之ヲ輕減又ハ免
除ス

第二十二條ノ三 左ニ掲タル事項ガ法
令、法令ニ基ク命令又ハ行政官廳ノ指
導若ハ斡旋ニ依リ昭和十七年四月一日
以後昭和十八年三月三十一日迄ニ事業
ノ統制ノ必要上爲サル場合ニ於テハ
命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ登記ノ登錄
稅ノ額ハ他ノ法令ニ別段ノ規定アル場
合ヲ除クノ外登錄稅法ニ拘ラズ左ノ額
ニ依ル但シ登錄稅法ニ依リ算出シタル
登錄稅ノ額ガ左ノ額ヨリ少キトキハ其
ノ額ニ依ル

第一會社ノ設立
金錢出資ニ依ル拂込株金額及金
錢ヲ目的トスル株金以外ノ出資
ノ價格ノ千分ノ五ト金錢以外ノ
財產ノ出資ニ依ル拂込株金額及
金錢以外ノ財產ヲ目的トスル株
金以外ノ出資ノ價格ノ千分ノ一
トノ合計額
會社資本ノ增加
金錢出資ニ依ル増資拂込株金額
及金錢ヲ目的トスル株金以外
外ノ財產ノ出資ニ依ル増資拂込
株金額及金錢以外ノ財產ヲ目的
トスル株金以外ノ出資ノ價格ノ
千分ノ一トノ合計額
ニ依リ之ヲ輕減又ハ免除ス
當該所得稅額ノ全部

本法ハ昭和十七年四月一日ヨリ之ヲ施行
ス但シ第一條ノ第十五ノ規定ハ公布ノ日
ヨリ之ヲ施行シ第二十一條ノ二ノ規定施
行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
各事業年度ノ所得ニ對スル法人稅、法人
ノ各事業年度ノ純益ニ對スル營業稅及法
人ノ臨時利得稅ニ付テハ昭和十七年一月
一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、清
算所得ニ對スル法人稅及法人ノ清算純益
ニ對スル營業稅ニ付テハ第一條ノ十七ニ
規定スル場合ヲ除クノ外同日以後ニ於ケ
ル解散又ハ合併ニ因ル分ヨリ本法ヲ適用
ス

昭和十七年一月一日以前ニ支出シタル寄附
金及同日以後ニ支出スル寄附金ニシテ同
日前ノ約束ニ係ルモノニ付テハ第一條ノ
十六第一項ノ規定ニ拘ラズ寄附金審査委
員會ノ諮詢ヲ經テ法人稅法ニ依ル所得、
營業稅法ニ依ル純益及臨時利得稅法ニ依
ル利益ノ計算上其ノ全部又ハ一部ヲ損金
ニ算入スルコトヲ得

國庫出納金端數計算法中改正法律案
國庫出納金端數計算法中左ノ通改正ス
第四條但書中「地租」ノ下ニ「及家屋稅」ヲ
加フ
第五條中「賣藥印紙稅及」ヲ削ル
第六條中「郡」ヲ削ル
本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
附則
戰時災害國稅減免法案
戰時災害國稅減免法
第一條 政府ハ戰時災害（戰爭ノ際ニ於
ケル戰鬪行爲又ハ之ニ起因シテ生ズル

災害ヲ謂タ以下同ジ）ニ因ル被害者ノ納付スベキ國稅及戰時災害ニ因ル被害者ニ對シ課セラルベキ國稅ニ付勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ輕減又ハ免除スルコトヲ得

第二條 政府ハ戰時災害ニ因ル被害者ノ納付スベキ國稅ニ付勅令ノ定ムル所ニ依リ課稅標準ノ計算ニ關スル特例ヲ設クルコトヲ得

第三條 政府ハ戰時災害アリタル地方ニ於テ納付スベキ國稅並ニ戰時災害ニ因ル被害者ノ納付スベキ國稅及戰時災害ニ因ル被害者ニ對シ課セラルベキ國稅ニ付勅令ノ定ムル所ニ依リ課稅ニ關スル申告及申請並ニ納期ニ關スル特例ヲ設クルコトヲ得

第四條 政府ハ戰時災害アリタル地方ニ於テ納付スベキ國稅並ニ戰時災害ニ因ル被害者ノ納付スベキ國稅及戰時災害ニ因ル被害者ニ對シ課セラルベキ國稅ニ付勅令ノ定ムル所ニ依リ其ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

第五條 第一條ノ規定ニ依リ輕減又ハ免除セラル國稅ハ法令上ノ納稅資格要件ニ關シテハ輕減又ハ免除セラレザルモノト看做ス

第六條 樺太ニ於テハ本法ノ施行ニ關シ必要アルキハ勅令ヲ以テ別段ノ定ヲ爲スコトヲ得

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
附則
本法ハ、公報ノ日ヨリ之ヲ施行ス
所得稅等ノ日滿二重課稅防止ニ關スル法律案
政府ハ所得稅其ノ他ノ内國稅ニ付溝洲國

ニ於ケル内國稅トノ間ニ於ケル課稅ノ重複ヲ避クル爲必要アリト認ムルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ輕減若ハ免除シ又ハ其ノ課稅標準ノ計算ニ關スル特例ヲ設クルコトヲ得

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
附則
本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
地方分與稅法中改正法律案

地方分與稅法中左ノ通改正ス
第二條第二項及第六條第一項中「百分ノ十七・三八」ヲ「百分ノ十三・二二」ミ、「百分ノ十五・一八」ヲ「百分ノ十九・八四」ニ改ム

第十條第一號中「百分ノ六十二」ヲ「百分八」ヲ「百分ノ四十」ニ改ム
第十五條第二項及第三項中「十五分ノ一」ヲ「七分ノ一」ニ改ム

第四十七條第二項ヲ左ノ如ク改ム
第二條第二項中「百分ノ十三・二二」トア ルハ昭和十六年度ニ於テハ百分ノ十
四・一七、昭和十七年度ニ於テハ百分ノ十三・四一、昭和十八年度ニ於テハ百分
ノ十三・二五トス

同條第三項中「百分ノ十五・一八」ヲ「百分ノ十九・八四」ニ改メ「百分ノ二十九・三五」ヲ下ニ「昭和十七年度ニ於テハ百分
ノ二十一・四二」ヲ加フ

第六條第一項中百分ノ十三・二二トア ルハ昭和十七年度分ニ付テハ百分ノ二
十二・三五、昭和十八年度分ニ付テハ百
分ノ十七・九八、昭和十九年度分ニ付テ
ハ百分ノ十三・六〇、昭和二十年度分ニ

付テハ百分ノ十三・二五トス
同條第三項中「百分ノ十五・一八」ヲ「百分

ノ十九・八四」ニ改メ「百分ノ二十九・三五」ヲ下ニ「昭和十七年度ニ於テハ百分
ノ二十一・四二」ヲ加フ

（國務大臣賀屋興宣君登壇）
○國務大臣（賀屋興宣君）只今議題トナリ
マシタ所得稅法中改正法律案外十六件ノ政
府提出法律案ニ付キマシテ、一括シテ御說
明申上ゲタイト存ジマス

第五十六條 昭和十七年度乃至昭和十九
年度ニ限リ第二十條ノ規定ニ依リ算出
シタル大都市配付稅、都市配付稅又ハ
町村配付稅ノ各總額ト新稅ノ各總額ト
ノ合算額ガ舊稅ノ各總額ニ命令ヲ以テ
定ムル率ヲ乘ジタル額ヲ超過スルモノ
ニ付テハ其ノ超過額ノ三分ノ二ノ額ヲ
大都市配付稅、都市配付稅又ハ町村配
付稅ノ總額ヨリ減額ス

第六十二條 昭和十七年度乃至昭和十九
年度ニ限リ大都市配付稅額及新稅額ノ
合算額ガ舊稅額ニ命令ヲ以テ定ムル率
ヲ乘ジタル額ヲ超過スル市ニ付テハ其
ノ超過額ノ三分ノ二ノ額ヲ大都市配付
稅ノ額ヨリ減額シテ之ヲ分與ス
第六十八條 昭和十七年度乃至昭和十九
年度ニ限リ都市配付稅（第三種配付
稅ノ額ヲ除ク）及新稅額ノ合算額ガ舊稅額
ニ命令ヲ以テ定ムル率ヲ乘ジタル額ヲ
超過スル市ニ付テハ其ノ超過額ノ三分
額ヲ除ク）ノ額ヨリ減額シテ之ヲ分與ス
第七十二條及第七十四條中「及昭和十六
年度」ヲ「乃至昭和十七年度」ニ改ム

本法ハ昭和十七年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
附則
本法ハ、公報ノ日ヨリ之ヲ施行ス
所得稅等ノ日滿二重課稅防止ニ關スル法律案
政府ハ所得稅其ノ他ノ内國稅ニ付溝洲國
政
本法ハ、公報ノ日ヨリ之ヲ施行ス
附則
本法ハ、公報ノ日ヨリ之ヲ施行ス
所得稅等ノ日滿二重課稅防止ニ關スル法律案
政府ハ所得稅其ノ他ノ内國稅ニ付溝洲國

ス
（國務大臣賀屋興宣君登壇）
○國務大臣（賀屋興宣君）只今議題トナリ
マシタ所得稅法中改正法律案外十六件ノ政
府提出法律案ニ付キマシテ、一括シテ御說
明申上ゲタイト存ジマス

大東亞戰爭ノ進展ニ伴ヒ、臨時軍事費ハ
勿論、戰爭ノ爲メ避クベカラザル諸經費ハ
極メテ多額ニ達スル見込デアリマシテ、假
令不急不要人經費ニ付キマシテ極力節約ヲ
加ヘマシテモ、尙ホ今後我國ノ財政需要
ハ相當長期ニ亘リ膨脹スルモノト認メラレ
ルノデアリマス、又戰時經濟ノ圓滑ナル運
營ニ資シマスル爲ニハ、國民一般ノ購買力
ヲ吸收シ、物資ノ不急消費ヲ極力抑制スル
ノ必要ハ、今後益々加重セラルモノト思フ
ノデアリマス、政府ト致シマシテハ、財政
ノ需要、國民生活及ビ國民經濟ニ及ボス影
響等ニ付キマシテ慎重考究ヲ遂ゲ、稅制ノ
全般ニ瓦ル增稅計畫ヲ樹立致シマシテ、曩
ニ早急實施ヲ要スルト認メラレマスル酒稅
其ノ他ノ間接稅ヲ中心トスル增稅案ヲ、第
七十七回帝國議會ニ提案ヲ致シマシテ、其
ノ協贊ヲ得マシテ現ニ實行中デアルノデア
リマスガ、今回更ニ増加致シマスル臨時軍
事費ノ財源ノ一部ニ充テマスル爲メ、直接
稅ヲ中心トスル增稅ヲ行ヒ、是ト共ニ必要
ナル稅法ノ改正ヲ爲サントスルモノデアリ
マス、今次增稅案ノ作成ニ當リマシテハ、
戰時ニ於ケル財政需要ニ對應シテ國庫收入
ノ増加ヲ圖リ、之ニ依リ戰時財政ヲ強化ス
ルト同時ニ、一面購買力ノ吸收ニ資スル爲
ス、現下ニ於ケル經濟情勢及ビ國民負擔力
ヲ考慮シツツ、分類所得稅ノ增徵ヲ中心ト
致シマシテ、各種ノ直接稅ニ付キ相當稅率

ヲ引上ゲタノデアリマス、是ト共ニ現行間接税ノ一部ニ付キマシテモ増徴ヲ行ヒマス、其ノ外電氣瓦斯税、廣告税及ビ馬券税、此ノ三税ヲ創設スルコトト致シタノデアリマス、尙ホ他面貯蓄ノ増強生産力ノ擴充、產業ノ再編成並ニ人口及ビ國民保健政策ノ圓滑ナル遂行ニ資シマスル等ノ爲ニ必要ト認ムル租税上ノ措置ヲ講ズルコトト致シタノデアリマス、是ヨリ今回ノ增税案内容ノ概略ヲ御説明申上ガマス、先づ分類所得税ニ付キマシテハ、今次増税ノ趣旨ニ鑑ミマシテ増税ノ主眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時ニ一面ニ於テ購買力ノ吸收ニ資シマスル爲メ、眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時ニ一面ニ於テ購買力ノ吸收ニ資シマスル爲メ、眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時ニ一面ニ於テ購買力ノ吸收ニ資シマスル爲メ、眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時ニ一面ニ於テ購買力ノ吸收ニ資シマスル爲メ、眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時ニ一面ニ於テ購買力ノ吸收ニ資シマスル爲メ、眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時ニ一面ニ於テ購買力ノ吸收ニ資シマスル爲メ、眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時ニ一面ニ於テ購買力ノ吸收ニ資シマスル爲メ、眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時ニ一面ニ於テ購買力ノ吸收ニ資シマスル爲メ、眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時ニ一面ニ於テ購買力ノ吸收ニ資シマスル爲メ、眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時ニ一面ニ於テ購買力ノ吸收ニ資シマスル爲メ、眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時ニ一面ニ於テ購買力ノ吸收ニ資シマスル爲メ、眼ヲ之ニ置キマジテ、廣ク國民ハ其ノ能力ニ及ジテ戰費ヲ負擔スルコトト爲シ、同時にニ付キマシテハ百分ノ十ヲ百分ノ十六ニ、配當利子所得ニ付キマシテハ百分ノ十ヲ百分ノ十五ニ、營業所得ニ付キマシテハ百分ノ八・五ヲ百分ノ十三ニ、營業以外ノ事業所得ニ付キマシテハ百分ノ七・五ヲ百分ノ十二ニ、又勤勞所得ニ付キマシテハ百分ノ六ヲ百分ノ十五ニ引上ゲルコトト致シタノデアリマス、又不動産所得ノ免稅點現在二百五十圓デアリマスルノヲ百五十圓ニ、事業所得ノ基礎控除五百圓ヲ四百圓ニ、勤勞所得ノ基礎控除七百二十圓ヲ六百圓ニ引下ゲタノデアリマス、右ノ増税ニ伴ヒマシテ、扶養家族多半

者ノ負擔ヲ緩和スルコトハ、負擔ノ衡平ノ見地ヨリ見マシテモ、人口及び國民保健政策ノ目地カラ考ヘマシテモ、此ノ際適當ナル措置ト考ヘラレマスルノデ、扶養家族ノ控除額ヲ相當引上ガマスルト共ニ、更ニ五人以上ノ子子女ヲ有スル所得ニ對シマシテハ、特ニ控除額ヲ多クスルコトニ致シマシタノデアリマス、又是ト共ニ生命保險料ニ付キマシテモ、他ノ所得トノ權衡上新タニ分類所得税ヲ課スルコトト致シタノデアリマス、從來課税外ニ置カレテ居ツタモノニ付キマシテモ、他ノ所得トノ權衡上新タニ分類所得税ヲ課スルコトト致シタノデアリマス、次ニ綜合所得税ニ付キマシテハ、課稅最低限ハ從來五千圓デアリマシタガ、各方面トニ負擔ヲ增加スルノ要アル此ノ際トシテトニ負擔ヲ增加スルノ要アル此ノ際トシテハ、之ヲ引下ゲマシテ三千圓トシタノデアリマス、稅率ニ付キマシテハ現在既ニ相當高率ノ課稅ヲナシツツアルノデアリマスルカラ、此ノ點ヲモ考慮シマシテ、大體二割ノ引上ヲ行フコトト致シ、三千圓ヲ超ユル最モ少キ部分ニ對シマシテハ百分ノ六、五十分ノ超エマスル最高ノ部分ニ付キマシテハ百分ノ七十二ノ稅率ト致シ、此ノ間所得ノ階層ニ應ジマシテ適當ニ率ヲ增加致シマス、總稅額ニ於テ三割程度ノ増徴ト相應シタノデアリマス、併シ一面扶養家族ニ對スル控制額ヲ相當程度引上ガル等ノ措置ヲ講ズルコトト致シテ居リマス、

次ハ間接稅ニアリマスルガ、織物消費稅ニ付キマシテハ、現在ノ負擔ヲモ考慮致シマシタ上、稅率ヲ百分ノ十ヨリ百分ノ十五ニ付テモ、一定ノ利得ニ對シテハ稅率ヲ引上ガルコトト致シタノデアリマス、尤上ヲ見合セマシテ、負擔ノ緩和ヲ圖ルコト致シタノデアリマス、個人ノ臨時利得稅ニ付キマシテハ、營業利得ニ對スル稅率ニ付キマシテハ、營業所得ニ付キマシテハ、現在ノ負擔ヲモ考慮致シマシタ上、稅率ヲ百分ノ十ヨリ百分ノ十五ニ付テモ、一定ノ利得ニ對シテハ稅率ヲ引上ガルコトト致シタノデアリマス、尤モ一般大衆ノ生活ニ關係ノ深イ織物ニ對シマシテハ、臨時的措置トシテ現行ノ儘据置稅中「マツチ」ニ付テハ、現行稅率千本ニ付キ五錢デアリマスルノヲ十錢ニ引上ゲマシタ、又印紙稅ニ付キマシテハ、物品切手ヲ除キマシテ、最近屢次ノ增稅ニ當リ之ヲ增徵シテ

居リマセヌ點ヲモ考慮致シマシテ、少シク
増課程度ヲ高ク致シマシテ、總稅額ニ於テ
七割程度ノ增稅ヲ行フコトト致シタノデア
リマス

次ニ新稅ト致シマシテハ、電氣瓦斯稅、
廣告稅及ビ馬券稅ヲ創設致サントスルノデ
アリマス、電氣瓦斯稅ハ住宅、商店等ニ於
ケル電氣又ハ瓦斯ノ使用ニ付テハ、他ノ消
費稅トノ權衡上、應分ノ負擔ヲナサシメマ
スコトガ適當ト考ヘラレマスルノミナラズ、
之ニ課稅スルコトニ依リ、消費ノ抑制ニモ
資シ得ルトノ考へカラ、住宅、商店、旅館、
劇場等ノ用ニ供スル電氣瓦斯ノ消費ニシテ
料金ガ一箇月三圓以上ノモノ等ニ對シ、料
金ノ百分ノ十ノ稅率ヲ以テ課稅セントスル
モノデアリマス

廣告稅ハ、廣告ハ通常營業ニ關スルモノ
デアリマシテ、之ニ依リ營業上ノ利益ヲ相
當增加シ得ルモノデアリ、又營業ニ關係ガ
ナイモノニ付キマシテモ、斯カル方面ニ對
スル支出ハ相當攢稅ガアリト認メラレル方
面モアリマスルノデ、之ニ付テモ或ル程度
ノ課稅ヲナスヲ適當ト考ヘマシテ、各種ノ
廣告ニ對シ料金ノ百分ノ十又ハ一定額ノ稅
率ヲ以テ課稅セントスルモノデアリマス
次ニ馬券稅デアリマスルガ、競馬ノ勝馬
投票券ノ賣上ニ對シテハ、從來納付金ヲ納
付セシメテ居ツタノデアリマスガ、勝馬投
票券又ハ優等馬票ノ賣上金及び其ノ購買者
ニ對スル拂戻金ニ付キマシテハ、此ノ際或
ル程度ノ課稅ヲナスヲ適當ト認メマシテ、

本稅ヲ創設致シタノデアリマス、即チ勝馬
投票券ノ賣上金ニ對シマシテハ百分ノ七、
優等馬票ノ賣上金ニ對シテハ百分ノ四勝
馬投票券ノ購買者ニ對スル拂戻金ニ對シ
マシテハ百分ノ二十、優等馬票ノ購買者ニ
對スル拂戻金ニ對シテハ百分ノ十、斯様ナ
稅率ニ依リ課稅致サントスルモノデアリマ
ス

次ニ臨時租稅措置法ノ改正ニ付キ御說明
致シタイト存ジマス、今回ノ增稅案ノ作成
ニ當リマシテハ、增稅スペキ租稅ノ種類及
ビ增稅額ノ決定ニ當リマシテ、經濟諸政策
トノ調和ニ付キ慎重ナル考慮ヲ拂ツタ次第
デアリマス、即チ貯蓄ノ増強、生產力ノ擴
充、產業ノ再編成政策ノ圓滑ナル運用ニ資
スル等ノ爲ニ、臨時租稅措置法ヲ改正致シ
マシテ、租稅上各般ノ必要ナル措置ヲ講ジ
タノデアリマス、其ノ主ナル點ニ付テ御説
明申上げマスルト、第一ハ戰時下益緊要ト
セラレル貯蓄ノ増強ニ資シマスルコトデア
リマス、之ニ付キマシテ各種ノ措置ヲ講ジ
タノデアリマスガ、即チ個人ノ長期預金及
ビ一定ノ期間据置キマシタ登録公社債等ノ
利子ニ對シ、分類所得稅ヲ輕減スルコトト
致シタノデアリマス

次ニ今回ノ配當利子所得ニ對スル增稅ハ、
金融機關ニ對シ相當ノ影響ヲ及ボスコトト
ナリマスルノデ、金融機關ノ資金運用ヲ合
理的ナラシムルト共ニ、其ノ經營ヲ堅實ニ
シマスル爲ニ、金融機關相互間ノ預金デア
リマシテ、一定ノ條件ヲ具備スルモノニ付

テハ分類所得稅ヲ免除シ、又一定ノ金融機
關ノ保有スル供託公社債又ハ登錄公社債ノ
利子ニ對スル分類所得稅ノ稅率ヲ、相當程度
輕減スルコトト致シタノデアリマス、其
ノ他生命保險會社ニ對シマシテハ、昭和十
五年ノ稅制改正ニ於テ、株式配當ニ對シ源
泉課稅ノ創設ヲ致シマシタ際ニ、從前ヨリ
所有シテ居リマス株式ノ配當ニ對シテ分類
所得稅ヲ輕減スルコトトナツテ居ルノデア
リマスルガ、今回ハ其ノ輕減ノ程度ヲ更ニ
多クスルコトト致シタノデアリマス

第二ハ、時局下極メテ重要ナル生產力ノ
擴充ヲ促進シマスル爲ノ措置デアリマス、
即チ法人ガ其ノ留保所得ヲ以テ國家ノ認メ
テ以テ必要ト致シマスル設備ノ擴張ヲナシ、
又ハ國債等ノ買入ニ充テマシタ場合ニ於ケ
ル法人稅輕減ノ制度ヲ、相當擴張致シタノ
デアリマス、又配當所得ニ對スル增稅ガ今
後ノ株式拂込ニ與フル影響ヲ緩和シマスル
爲メ、此ノ時局ニ際シテ緊要ナリト認メラ
ル外營業稅法、所得稅、法人稅内外地
關涉法、國庫出納金端數計算法ニ付キマシ
テモ、ソレバ、必要ナル改正ヲ加フルコト
ト致シタノデアリマス

右申上げマシタ今次ノ增稅竝ニ臨時措置
ニ依リマス減額等ヲモ差引キマシテ、今次
ノ增稅ニ依リマシテ平年度ニ於キマスル增
稅額ハ約十一億五千万圓デアリマス、初年
度即チ十七年度ニ於キマシテハ約九億七
千萬圓ノ國庫收入ノ增加トナル見込デゴザ
イマス、而シテ昭和十七年度ノ增收見込額
ニ相當スル金額ハ、臨時軍事費追加豫算ノ
財源ノ一部トシマシテ、一般會計ヨリ同特
別會計ニ繰入レルコトト致シテ居ル次第デ
アリマス

以上所得稅法中改正法律案等ニ付キマシ
テ、提案ノ理由ヲ説明申上げタ次第デアリ
マス、何卒御審議ノ上速カニ協賛ヲ、與ヘ
ラレシコトヲ希望致シマス（拍手）

○議長（田子一民君） 東條内務大臣

〔國務大臣東條英機君登壇〕

○國務大臣(東條英機君) 只今議題トナリ
マシタ地方分與税法中改正法律案ニ付キマ
シテ、提出ノ理由ヲ御説明申上ゲマス、改
正ヲ必要ト致シマス理由ハ、國稅ノ増稅等
ニ伴ヒマシテ、配付稅ノ割合ニ付キ改正ヲ
要スルモノガアリマスルト共ニ、配付稅ノ
分與方法ニ付キマシテ緊急差措キ難キ改正
ヲ加フル必要ガアル爲メデアリマス、而シ
テ改正セントスル所ノ事項ハ大體次の五項
目デゴザイマス。

其ノ第一ハ、國稅ノ增稅等ニ伴ヒマシテ、
配付稅ノ割合ヲ改正致スコトデアリマス、

第二ハ、市町村財政ノ實情ニ鑑ミマシテ、
配付稅ノ一部ヲ市町村ニ移讓センガ爲ニ、
道府縣配付稅ト市町村配付稅ノ割合ヲ、
現行ハ道府縣分百分ノ六十二、市町村分
百分ノ三十八トナツニ居リマスルノヲ、道
府縣分百分ノ六十、市町村分百分ノ四十
改正スルコトデアリマス、第三ハ、災害債
ノ償還ニ依リマシテ財政ノ窮乏著シキ道府
縣ノ財政ヲ緩和致シマスルガ爲ニ、課稅力
分與ノ基準トナリマスル單位稅額カラ控除
スル災害土木費負債額ノ一定率、即チ現行
十五分ノ一トアリマスノヲ七分ノ一ト改正
スルコトデアリマス、第四ハ昭和十九年度
マデニ於キマスル經過的制限ニ用ヒマス
舊稅額ニ對スル割增率ガ、法律デ規定シテ
アリマスコトハ實情ニ即シマセヌノデ、之
ヲ命令ヲ以テ定ムル率トスルコトニ改正ス
ルコトデアリマス、第五ハ、昭和十七年度

配付稅分與額ハ、現行法ニ依リマスト、昭
和十六年度ニ於テ算定スルコトナツテ居

リマスガ、分與ノ滴正ヲ期センガ爲ニ、昭
和十七年度ニ於テ算定スルコト致シマシ

テ、之ニ伴フ關係條文ヲ改正スルコトデア

リマス、以上ノ五項目デアリマス、是等ハ

何レモ戰時トニ於キマスル地方團體ノ財政

需要ニ即應スベク分與ノ適正ヲ期シマスル

ニ於テ、改正ヲ必要トスル事項デゴザイマ

ス

以上ハ今回改正法律案ヲ提出スルニ至リ
マシタ理由デゴザイマス、何卒御審議ノ上
速カニ御協賛アランコトヲ御願ヒ致シマス
(拍手)

○議長(田子一民君) 各案ノ審査ヲ付託ス
ベキ委員ノ選舉ニ付テ御諮詢致シマス

○依光好秋君 日程第二十乃至第三十七ノ
十八案ヲ一括シテ議長指名四十五名ノ委員
ニ付託セラレシコトヲ望ミマス

○議長(田子一民君) 依光君ノ動議ニ御異
議アリマセヌカ

〔異議ナシト呼ブ者アリ〕

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマ
ス、仍テ動議ノ如ク決シマシタ——日程第
三十八、兵器等製造事業特別助成法案ノ第
一讀會ヲ開キマス——東條陸軍大臣

第三十八 兵器等製造事業特別助成法
案(政府提出) 第一讀會

兵器等製造事業特別助成法案

兵器等製造事業特別助成法

第一條 本法ハ兵器等ノ生產力ノ確保ヲ

圖ル爲其ノ製造事業ニ對シ特別ノ保護

助成ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條 本法ニ於テ兵器等ト稱スルハ兵
器、艦船、此等ノ部品其ノ他車輛上特

ニ必要ナル物資ニシテ勅令ヲ以テ定ム
ルモノヲ謂ヒ兵器等製造事業者ト稱ス

ルハ兵器等ノ生產及修理ノ事業ヲ營ム
者ヲ謂フ

第三條 政府ハ兵器等ノ生產力ヲ確保ス
ル爲必要アリト認ムルトキハ命令ノ定
ムル所ニ依リ兵器等製造事業者ニ對シ
兵器等製造設備ヲ無償ニテ貸付シ當該

設備ニ依ル事業ノ經營ヲ命ズルコトヲ
得

第四條 政府ハ命令ノ定ムル所ニ依リ兵
器等製造事業者ニ對シ前條ノ規定ニ依リ
テ當該事業者ニ貸付スベキ設備ノ建設
ヲ命ズルコトヲ得此ノ場合ニ於テ設備
ノ建設ニ要スル費用ハ命令ノ定ムル所
ニ依リ國庫ノ負擔トス

第五條 政府ハ兵器等ノ生產力ヲ確保ス
ル爲必要アリト認ムルトキハ命令ノ定
ムル所ニ依リ兵器等製造事業者ニ對シ
一定ノ期間内ニ政府ニ於テ買上グベキ
コトヲ條件トシテ必要ナル設備ノ新設、
擴張又ハ改良ヲ命ズルコトヲ得

前項ノ規定ニ依ル設備ノ買上ヲ爲ス場

合ニ於テ事業ノ經營上當該設備ト一體

不可離ノ關係ヲ有スト認ムベキ他ノ重

要ナル設備アルトキハ政府ハ命令ノ定
ムル所ニ依リ併セテ之ヲ買上グルコト
ヲ得

第六條 第三條ノ規定ニ依リ兵器等製造
事業者ニ貸付シタル政府所有ノ設備ニ
付當該事業者ノ申請アルトキハ政府ハ

命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ拂下グルコ
トヲ得

第七條 政府ハ兵器等ノ生產力ヲ確保ス
ル爲必要アリト認ムルトキハ命令ノ定
ムル所ニ依リ兵器等製造事業者ニ對シ
其ノ事業ニ屬スル重要ナル設備ヲ指定
シ之ニ付一定ノ期間内ニ償却ヲ爲スベ
キコトヲ命ズルコトヲ得

前項ノ償却ニ付テハ所得稅、法人稅其
ノ他ノ租稅ノ課稅標準ノ計算ニ關シ命
令ヲ以テ特例ヲ設クルコトヲ得

第一項ノ償却ニ係ル設備ニ依リ生產又
ハ修理シタル兵器等ニ付政府ノ支拂フ
ベキ代金ハ當該償却ヲ斟酌シテ之ヲ定
ムルモノトス

第八條 第三條又ハ第五條第一項ノ規定
ニ依ル命令ニ係ル設備ハ兵器等製造事
業者之ヲ政府ノ指定スル用途以外ノ用
途ニ供スルコトヲ得ズ但シ命令ヲ以テ
定ムル場合ハ此ノ限りニ在ラズ

第五條第一項又ハ前條第一項ノ規定ニ
依ル命令ニ係ル設備ニ付テハ兵器等製
造事業者ハ政府ノ許可ヲ受クルニ非ザ
レバ讓渡其ノ他ノ處分ヲ爲スルコトヲ

得ズ

第九條 政府ハ兵器等ノ生産ノ技術又ハ設備ノ維持培養ヲ圖ル爲特ニ必要アリト認ムルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ兵器等製造事業者ニ對シ兵器等ノ生産又ハ修理ヲ命ズルコトヲ得

第十條 政府ハ軍事上必要アリト認ムルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ兵器等製

造事業者ニ對シ必要ナル設備、工具、ジグ、検査具若ハ圖面ノ保有ヲ命ジ、原料若ハ材料ノ取得及保有ヲ命ジ又ハ政府ニ屬スル此等ノ物ノ保管ヲ命ズルコトヲ得

政府ハ必要アリト認ムルトキハ前項ノ規定ニ依リ保有ヲ命ジタル物ニ付之ガ更新ヲ命ズルコトヲ得

前二項ノ規定ニ依ル命令ニ因リ生ジタル損失ハ、勅令ノ定ムル所ニ依リ政府之ヲ補償ス

前項ノ補償ヲ伴フベキ命令ハ之ニ因リ要スペキ補償金ノ總額ガ帝國議會ノ協賛ヲ經タル金額ヲ超エザル範圍内ニ於テ之ヲ爲スコトヲ要ス

第十一條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依ル兵器等製造事業者ノ權利義務ハ事業ト共ニ其ノ承繼人ニ移轉ス

本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ爲シタル手續其ノ他ノ行爲ハ前項ノ承繼人ニ對シテモ亦其ノ效力ヲ有ス

第十二條 政府ハ必要アリト認ムルトキハ兵器等製造事業者ニ對シ業務及財產

ノ狀況ニ關シ報告ヲ命ズルコトヲ得

ハ處分ニ違反シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十七條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ吏ヲシテ兵器等製造事業者ノ事務所、營業所、工場、倉庫其ノ他ノ場所ニ臨檢シ業務若ハ財產ノ狀況又ハ帳簿書類其ノ他ノ物件ヲ検査セシムルコトヲ得

此ノ場合ニ於テハ其ノ身分ヲ示ス證票ヲ携帶セシムベシ

第十三條 政府ハ第三條、第五條第一項又ハ第七條第一項ノ規定ニ依ル命令ヲ受ケタル兵器等製造事業者（以下受命事業者ト稱ス）ニ對シ其ノ命令ニ係ル

事業ノ業務及會計ニ關シ監督上必要ナル命令ヲ發シ又ハ處分ヲ爲スコトヲ得

第十四條 受命事業者タル法人ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノノ役員ノ選任及解任竝ニ其ノ目的變更ノ決議ハ政府ノ認可ヲ受クルニ非ザレバ其ノ效力ヲ生ゼズ

第十九條 第十五條、第十六條及第十七條第一號ノ罰則ハ其ノ者ガ法人ナルトキハ理事、取締役其ノ他法人ノ業務ヲ執行スル役員ニ、未成年者又ハ禁治產者ナルトキハ其ノ法定代理人ニ之ヲ適用ス但シ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニルコトヲ得

第十五條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ三千圓以下ノ罰金ニ處ス

一 第八條第一項又ハ第二項ノ規定ニ違反シタル者

二 第十條第一項又ハ第二項ノ規定ニ依ル命令ニ違反シタル者

三 第十六條 第十三條ノ規定ニ依ル命令又

付キマシテ提案ノ理由ヲ御説明致シマス

大東亞戰爭遂行ノ爲ニ必要ト致シマス

多量ニシテ而モ精強ナル兵器、艦船等ノ供給ニ遺憾ナカラシムル爲ニハ、是等ノ生産力ヲ極度ニ擴充増強致シマシテ、其ノ能力ヲ發揚スルコトノ緊要デアリマスルコトハ、今更申上ダルマデモナイ所デアリマス、

而シテ其ノ大キナ部分ハ之ヲ民間ノ事業ニ期待シテ居ルノデアリマス、然ルニ兵器艦船等ノ生産ノ爲ニハ、巨大ニシテ而モ他ニハ虛偽ノ陳述ヲ爲サズ若

又ハ其ノ質問ニ對シ答辯ヲ爲サズ若ハ虛偽ノ陳述ヲ爲シタル者

第十八條 兵器等製造事業者ハ其ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ガ其ノ業務ニ關シ第十五條、

第十六條又ハ前條第一號ノ違反行爲ヲ爲シタルトキハ自己ノ指揮ニ出デザルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得

第十九條 第十五條、第十六條及第十七條第一號ノ罰則ハ其ノ者ガ法人ナルトキハ理事、取締役其ノ他法人ノ業務ヲ執行スル役員ニ、未成年者又ハ禁治產者ナルトキハ其ノ法定代理人ニ之ヲ適用ス但シ營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニルコトヲ得

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

（國務大臣東條英機君登壇）

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

○國務大臣（東條英機君）只今議題ト相成

必要ナル兵器等ノ生産力ヲ増強確保致シマス

是ニ於キマシテ國防國家ト致シマシテ、

スル爲メ、戰時ト平時トヲ問ハズ一貫シタ
觀點ニ立ツテ、必要トスル個々ノ事業ニ付
キ特別ノ助成ヲ致シマシテ、企業者ヲシテ
安シジテ其ノ創意ヲ最高度ニ發揚セシムル
ノ措置ヲ講ズルコトガ急務デアルト考フル
ノデアリマス、本法案ハ此ノ目的ヲ達スル
コトヲ期スルモノデアリマス

何卒御審議ノ上速カニ協賛ヲ與ヘラレン
コトヲ御願ヒ致シマス(拍手)

○議長(田子一民君) 本案ノ審査ヲ付託ス
ベキ委員ノ選舉ニ付テ御諮リ致シマス

○依光好秋君 本案ハ議長指名二十七名ノ
委員ニ付託セラレンコトヲ望ミマス

○議長(田子一民君) 依光君ノ動議ニ御異
議ゴザイマセヌカ

〔「異議ナシ」ト呼ブ者アリ〕

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマ
ス、仍テ動議ノ如ク決シマシタ

○依光好秋君 残餘ノ日程ヲ延期シ、明二
十三日定刻ヨリ特ニ本會議ヲ開クコトト
シ、本日ハ是ニテ散會セラレンコトヲ望ミ
マス

○議長(田子一民君) 依光君ノ動議ニ御異
議アリマセヌカ

〔「異議ナシ」ト呼ブ者アリ〕

○議長(田子一民君) 御異議ナシト認メマ
ス、仍テ動議ノ如ク決シマシタ、次會ノ議
事日程ハ公報ヲ以テ通知致シマス、本日ハ
是ニテ散會致シマス

午後三時四十五分散會

二一 頁 四 段 六 行 誤
兩端 西端 正

衆議院議事速記録第三號中正誤

